

911.3

≠

長

長
長
長
長
長

而

而
而
而
而
而

行

行
行
行
行
行

長

長
長
長
長
長

長

長
長
長
長
長



序

そのありて貞享元祿のちのころの俳諧
 七部をあらためて蕉門七部の集と
 いふをたやにあらはす運の比のふれ
 をつけとありまやいつれとこそん
 づかふあはれとつとも既世のいひ
 くちとちのりともされハとて又是非
 論ひさふ詮ぬりともあり彼七部と

序
 蕉門七部
 蕉門七部の集
 蕉門七部の集
 蕉門七部の集

あつた世は所の巻くをあらわしめ
蕉翁一世の變化ありけりほく流り
乃先般をまじりむらうりあかしば
ゆけつて入の輩つひに握籠
て懸付せしんかみへうらさたりのと
なます嫌 某等とのあやけ追て
其角々編集をえらひ分てあつてふ
七部の外書を持ひて
世の中

序一

弘めむるを欲しきしあやうの
高賈しそ移神を凝り業を
切りおりの板板あつたはれを又
俳諧門に入て其及をまぬると
おりのものもこのあやうの意中
綴ひつとてかてこれらの法集より
こはれし新古のそとを雅俗の境
をもめりて蘊奥の

けりよりのあはれやともはれつめ
ころ所の七部の集もみゆり栗乃
新ゆりうぶ家誰の家こころつる
續みゆり栗乃こころや正ゆり
骨髄ゆり入ぶつみゆりの巻く
あゆりこころを花實在こころ晋子
一家のゆり流を盡せゆりこころ也
從元實のありこころ一變ゆりの伴あり

序ノ二

とらこころに載さるるゆりすゆりて
書をこころゆり取捨の大こころあり
をこころゆりゆりあゆりこころ僕
ゆりこころ晋子の流をこころゆり
かの風骨を探るゆりこころゆり
そゆり勝理をこころゆりこころゆり
こころゆり一泓の口實乃ゆりこころゆり
こころ躍ゆりこころゆり

五言古詩十一首

五言古詩十一首
其一
其二
其三
其四
其五
其六
其七
其八
其九
其十
其十一

晉書

風入骨。外。山。以。之。作。象。

吟生

戲食粗支地。真令人老。

相。向。所。與。遠。世。不。見。容。

曠。老。壯。世。將。去。雨。似。此。

題真

自古入貧。交。計。之。貧。而。

嗚ウ古コ人ニ貧シ交カ行キ之ノ詩シ吐ツ而シテ
戲シ序ス

翻ヒ手テ作リ雲ト覆フ手ヲ雨ノ紛ク

俳ハ句ク何レ須ク數セ世ヲ不レ見ル宗ヲ

鑑カ貧シ時ニ交カ此ノ道ヲ今ニ人ノ棄ル

如シ土ノ

風ノ々々世ニ拾テ水ヲぬク影ヲ累ス

晉ノ其ノ角ノ撰ル

虚栗一

虚栗集

改正

礼レ者ノ敲キ門ノ志ヲ々々々々花ノ明ク也

賤ニ春ノ餅ヲ又ニ舊ノ宿ヲあらん

初ニ元ノはらからりノ床ヲやり鳥ノ

先ニ伴ニ又ニ方ノ山ヲおろりノやノ門ノのノ松ノ

春ノ柴ヲ負ヒ葩ヲ木ヲ海ニ宿ヲをシ山ノ路ヲ火ヲ

餅ヲ焼キ富ヲを知ル日此ノ士ノ或シ

句ハひのり今年廿五ノ翁ノ

松ノ陰ニやと辭ヲかき次ノ教ヲ梅ノ子ノ

幻ノ叶
三ノ峯
玉ノ尺
残ノ詞
翠ノ紅
麩ノ排
丈ノ排
杉ノ風
信ノ德

月ハ文科也あれ我蓬萊の朝日守
 叙迦逝く弥勤進ま次國は去
 山松やうゝ此叙より々物春
 六尺袴着く磨ん御りし玄のつ
 春よにねい食らめて年あや
 春ねりり人よりけり男より
 春ヲ何と風の子向め時々の梅を
 餅の室根深を蘭乃薰り哉
 海老卧龍餅をうりつあ玉あん
 屠蘇うゝで傘すさんあ時あ
 釣船乃るるの園や竈守

虚栄二

友静
 春澄
 千之
 千春
 ト尺
 楊水
 嵐蘭
 嵐竹
 北蛇
 楓興
 李下

餅の為こ向火の白蛇眠りけり
 初礼や富士をかきひて扇指
 代ヲ様ス浪池は鴻乃嘴純
 民の戸や松又餅さく百代
 初ちきやあけの端乃空セ極
 花中セ吉登之味線園栖鼓
 烟の中又多此昏るるを
 霞しん火く出見の世乃釣渚
 天和三年試筆

洗口
 枳風
 仙化
 柳興
 塔山
 才丸
 似春
 其角
 嵐雪

むよけ秋きさひ 又男もく

藤白

其二

浦島をあやゆるや世乃る我

同

塩鯛の死ヲりつて祝ひま

其角

芥炊く盃ハ号乃うつりま此

炭雪

其三

とね春の輿

孫もあり
舌もあり

櫛ヲ富

同

杖より移りし梅のつげんし

藤白

三線乃及第蝶の冠し高

其角

とくはるす子 女の声ありおつて奇

炭雪

虚栗三

芋室乃雪百やるる下あり菜

言籬

玄うとれうつり首の早苗は蔦

杉風

情うるや都の雪乃るのりあ菜

勝延

何故溪邊双白鷺

无憂頭上亦垂糸

髪ありぬき芥とるけ 沢邊火

其角

小袖着甘く 仿白へ梅がつ月

同

追鳥や梅枝の息をくすけし

千春

うらひすれよぶるあやしの辭賣

翠紅

鶺鴒日不浴白

鳥日不黙黒

川鳥白くを浴せりて白く
 瀬湫く去りぬひの佃真白く
 浪ヲ焼くと白魚星乃遠付海
 雪を凍て白くを流せ冬菜川
 白魚を眺みくぬを晴し舞哉
 去り魚の昔汀乃後の浦之至
 麩朽く釘乃角くむ芦へ火
 芦のあやしく蝸牛成角のかき火
 在原寺あり
 美男村乃柳のむくを泣せりり
 うくむくを涙を拭むる嬌柳

楓奥 全琴 麩崎 嵐朝 翠紅 心棘 黄吻 忘水 鼓角 芭蕉

一塵粟四

仙よ風女襦かきりり柳
 照君乃柳をさん屋塘うね
 柳よねくあ〜み猫ヲ釣夜式
 む〜は〜あ柳よねつる桂り那
 川風子夕日やすく候つ〜あ網
 柳よあそあのをありの夕燕
 傘子孫く〜か〜やぬを意
 被つ〜免舞〜り蓮乃小蓋
 声よ子〜が〜けの〜白鷺
 行雁や尺の〜手妻のむ益
 友〜の約代勞や〜八重雀笛

杉風 才九 木岡 四友 菖白 嵐雪 其角 曉雲 羊角 在慈 野笛

女よかりりて

ちりも哀猫は何程焼てうりりり
愛あはる猫は傾婦の媚ヲ仮
慈ちや猫こころごとくは翁根山

茂書
才九
東順

不生不滅乃心哉

湖棠乃軒ヲ悟ま祓えん像
笠立ヲ折てささるに早し温繁粥

其角
言水

寒食

木食を香が五烟なま日なり
寒食の日旅人食をこに飽つん
寒食や竈下は猫乃目を怪しむ

鼓角
友白
其角

憊々貴妃のちやめる戀の月

四友

春雨偶興

暮乃餅りひて羨滅の秋と誰
鳥賊の同り反て飛ぶ乃鏡うる

其流
工迪

三陽

醜子 挑裏の詩人盤白

其角

其角ヲ白く山吹乃粥

李下

榮泉の蛙小判は牙をよせて

柳奥

其二

けのそ背子土圭此あは花うりり

同

さく波うりり蝶乃釣竿

其角

凡心扇つを免やら向ふらん

李下

其三

僧乃謂うとは庐山乃批の時

同

龍多毛を握ルつまじく

柳奥

まふ心之とを敵は囚われく

其角

雛ヲ抱てうきうきひ批お契りけり

其流

霄月乃お丹かぐさや夜遊一雛

菖白

批園乃猫うひささきひか車

彦素

ひかよ意て故蕙のうら乱しぬ

松濤

雛系ひ批壺の腋よやどりてり

琴白

〔虚栗六〕

龍田娘をめけん雛乃かき綿

子堂

雛九うま婦や批の赤不老園

羊角

汝干浮海麻のせまる足て坊人

卜尺

汝干く水々懈り振引かきり哉

嵐雪

漢丈歩ぬ之々月ひろみ汝干く

立志

夕々や金をあけく

以貞

憂方知酒聖

貧始覺錢神

花よなき世我酒白く食里

芭蕉

眠ヲ尽ス陽炎乃瘦

一晶

病帯て青透夏を嘆らん

嵐雪

童子磔をよめり唐梅
 月ヲ罾す汀乃蓼ヲ芦刈て
 浪のさざれよふかこ釣糸
 琵琶波の雨より釣の河あより
 朝よえ風をみり紙衣
 浪人の恋をを識おゆめす
 やぶ乃一おみ入るひそあさ
 散さらく同宗旨ヲ折言ひたる
 藤ハ退之り肝魂ヲ奪
 雷鳥のちつひの嘴ヲ鳴ルらん
 終てこあや軽乃る

其角
 嵐蘭
 一品
 芭蕉
 嵐雪
 其角
 一品
 芭蕉
 嵐雪

虚栗七

傾城乃鏡を拵し神代ヨリ
 羽をとりよ角ヲうす風流雄
 化し好い棺ヲ出さ草の月
 破蕉誤ツテ詩の上ヲ次ッ
 釣糸よ西瓜ヲ贈る遙ナリ
 はくちきぬひの松浦片掬
 めづるあけやく乃萱庇
 蚤ハ私乃蓋を乃世
 挿入しぬ糸ハ六十乃荊あさ
 市所も松座うく世ヲ夷之
 人の怪異徳長の宵此髪子黒

一品
 其角
 嵐蘭
 芭蕉
 嵐雪
 其角
 一品
 芭蕉
 嵐雪

松田くらびちあや雪乃暁
 其角 出雪
 山野子飢る餅を貪ル
 其角 出蘭
 盗井乃月は伯夷が足あるぬ
 其角 芭蕉
 夕々し蛇艶書をやくは梅
 其角 出蘭
 笑ひさんやよ 帰ル 鬼
 其角 一品
 暁乃寐言を母子さゆきれて
 其角 芭蕉
 つねはあふんあふん
 其角 其角
 花は栖庐山の列をらん
 其角 出蘭
 柳はすのく 瀑布ヲ酒吞
 其角 出蘭

詠懐

花子今頼政の哥を知ル才哉
 露浴
 糸杖は赫くふべし 屯乃山
 幻吁
 刃の里は妻徳を乃日教く那
 似春
 雨屯ヲ咲て扱売の怒ル心あり
 麩疳
 何れぞ疵一 浴堂乃屯又干髪
 茶毒
 屯酔を故山は孫らう忘けり
 云笑
 にくくして 瑟を代乃峯の屯
 四友
 余は男席暮よ屯をみる男
 杉風
 あま笠カうき世つら花刃猿
 狂とつへ花人々合羽日照傘
 千春

吉野松王堂

斤足の石の磨いともひめひりり

千之

雨

庐山の夜上世の花は晝あらん

楊水

山いえむ上登東の羨人あらん

才丸

落花雨美人の化拙流し

一束

屯い楚地雨のちりや腐足帛

洗口

七賢の自盡よ

花と世を弁よりげき翁う那

樵花

軀不花死不休矣

嵐蘭

於屍屯と流るかぢのうね

（表冊九）

簑着るる樵り子川の花の如

房有

惜花不拂地

我僕該屯は寝ゆる

其角

代樵

彫笛縫簑花は暗せんう世哉

其角

小町乃像讚

おことごとく風犯礼乃姥さくら

宗因

羨を少くむん乃さくらあ流式

大排

鑑中女は衣そのう吹はくううね

菴句

いそ云へく同人は浮テの擽賤

房春

白あらんらあ去人と山さくら

松風

殿ハ持ッ舞餅うる様茶屋
出雪
昼乃君うけいと嘆り受
杉爪
橙のときをいづくや山さくら
利久
遊人きて昼乃さくら成翁瓶
子堂

目黒お隣堂まで

うは世本をわらに吟ぬ山様
其角
梨花ゆに持のふ蝶まくらん
嵐
海棠やうき世美人のや移り
樵花
らんはく口村此む乃和物や
九十
あんはくや春とぬ宿此忘ま菊
山店

さん屋水行

鹿果十

詩どか加多子ア〜〜蛙うぬ

楓奥

角田川名い田行つ草聖哉
文排

麦食也聖者菴くせ田あ〜猪
千鯨

田あ〜あじお生憎や居りあ名
拾螢

寺房のふ奥

下仕〜〜お成おるらり此豆腐石
雪叢

さくらかりさみさりや〜夕月夜
四友

茶花の盛や水司く神のかり〜
柳奥

蝶あ〜〜菜の花や入あひの種
翠紅

小雨りり露をま〜のう〜傘
房妻

あ〜つ〜〜を懐〜〜妹り里
小寺
紫菀

仙家よいささび摺らんそそ川原

鳳尾

山吹や无言禪師乃すて衣

藤白子

膝衣薪乃飢若早蕨

其角

子路り廟々へや秋とかなむらん

白子

其ささけりはれ 十月六日乃文

白子

有船の躰のさかりを惜び哉

白子

田捨伐ありとひくく 杜川

白子

金減るゑ世の介もうくれてや

白子

温袍ささびり伯母夢よと白

白子

心筋の昼り灯をのむ

白子

あさゆりさ文字此賊衣魚と云

白子

小神成りし寸涼庵の凡

白子

夕圃る宮女のお撲めりあ

白子

大盞七フ星をちくひり

白子

日兮月兮西瓜は劍ヲ曲ケル

白子

弓張角豆がよ半ヲ射ル

白子

里かゝれおは紙子のかじりて

白子

おろしは難い言の吉原

白子

米の礼者待みよいとせしり

白子

初木かりしは勝ルまぶ寺

白子

曉乃厨師の糸水押さうして
 巖も餅へかひりりの春
 獵師をいさあ女あとかく
 ちよひはぐりや首の池
 めき具足芦刈やつと剥きりん
 婆靴はゆる島おろし
 鳥葬はらあある昨日そつと
 寐さめ後りをさうぬ上臈
 残る月戸はさぬくの奇ヲサ
 幕の糸扱ひ髪ゆめてさる
 帳乃虚勞きりりありよけり

角 白子 角 白子 角 白子 角 白子 角 白子 角 白子 角 白子

龍泉上二

雨母親乃面ヲ拭懸む
 烟くせく男の立テ茶水くは
 入あひまてを借ス度あうな
 蝶居士々花の衾を夢ちり
 佛よけが守董立乃あ

白子 角 白子 角 白子

改復

待りし正ま正月の梅のむらり
 待りし古今夏之初み初哉
 山喜と啼く子祝受て切ル芥
 本と初才春抄の条は隠しや
 悲し喜や連飲ぬる人子祝
 何と守教之海や淀乃寶再
 半日乃下戸困居よくとる祝
 錦帳の鶯共波草此戸や郭云
 誰と謂し南天のむ北村郭云
 杓把遠哉日干らん おととさ次
 芭蕉 四友 素堂 巖蘭 翠紅 千之 千春 嵐雪 信徳 菖白

肥後十三

牙の篠月何と守志し 竿
 子祝芋も 靑より夜う夢
 郭云なるうなり 蜀北新茶哉
 錦と吐涙ぬ流しる 郭云
 何と守此のぬ里は習ひらん
 あつしは杓瓶や守めをゆと守
 冥途年の秋や待らん 何と守
 冥極や伏んし守けの却と守
 何と守羅紗乃毛衣くしん
 雨ヲ夕夜月化らん 何と守
 花めししし柳のしし柳と守
 杉風 李下 才丸 才滴 一蜂 獨子 如菴 東順 松緑 勝延 四友

中村

子祝おろくればなりぬうどの杜
 鼻毛刈人よきけとや子祝
 清くさし耳は香焼く郭云
 瑤瀉ヲ歎み奇くやとくさす
 我々人あらず我ヲ啼くまは子祝
 姿思夕て卯花は支ヲうむ女
 登るるを卯花さうぬくまは
 蟾ヲふんで夜に卯の花ヲ憎く
 四月十八日即興
 偽レル卯をば様は昼さけり
 輕をのむ心樓北上乃月
 調掩
 其流
 芭蕉
 其角
 同
 言水
 才九
 其角
 千之
 其角

虚見六十四

六の比代禪はあむむ秋乃風
 木さく立浪手麻梁まゝあ
 藏鹿菊以南手乃晴高
 茶越いあぬ蘇鉄一かぶ
 侘くてまきぬ詩を着る物射西
 吳乃旅衣酒をかきく
 名糶西施が影をこぼらん
 蘭手みれは紫乃汗
 篠波の小杉音あけく雪さく
 さみぐれは蛙遠来る
 位む人も志願乃古城をいじし
 角
 之
 角
 之
 角
 之
 角
 之
 角
 之
 角
 之
 角

石山の秋月と井乃曉鐘 角
 尺八梅さくら乃丸本子 之
 遊子おとりの國ヲ尋又元 角
 花日々に先娘乃もどり 之
 松あり隣り羽ふふは 角
 百千を響は仕志を侍 角
 色あふふらて燕う 角
 年坐しとる者彦山のおも 角
 毛吹嵐山又冬を晒スラ 之
 木がしは限士乃市者 角
 田火浦乃おさふく松 之

經る魂屋乃まろく寸 角
 夕へ秋の情を羽さけ 之
 拒の誓り涙城あふる 角
 子鳥乃空より迷ふ月 角
 盗人城をさる鎗の音さけ 角
 朧乃石裏を波を夜見 之
 年と日や賊の戸薪とみ 角
 うさばを荷ふ越の山 角
 劍術試壺谷より時を 之
 有朋自遠方来 角
 屯子根空囊に錢をもち 角

蛤麴カク々カク此コノやまのきキヲヲ燒ヤク 曰

麥刈マキ始ハジママカカハハシシ

若ニシ麦マキやむマくク此コノゆユめメよヨくクれレん
忘ワスレるルれレよヨ麦マキのノ穂ホ凡ニのノ初ハジうウけケるル
青アヲさサしシやヤ草クサ餅ホシのノ穂ホはハ出デけケん
麥マキ送オウわワいイてテつツりリ賤セのノつツ戸ド
ゆユめメくクけケるル青アヲ麦マキ白シロくク氷ヒ雨アメ祭マツル
麦マキよヨかカあアしシ薄ウスくク月ツキヲヲ入イるルまマのノ秋アキ
贈オウケ一ヒト鉄テツ
亦モトやヤ慳ケム今イマあアらラむムあアをヲ 勲
素ソ堂ドウ

自悦

ト尺

芭蕉

菴白

嵐朝

其角

消シユしシ方ハ此コノ何ナニ孰ナクをヲ吊ツルひヒらラりリ艱ガシ

雷虫

まマいイくクやヤ麥マキをヲむムくク乃ノ極キョク艱ガシ

嵐竹

まマありリ騾ロよヨくクまマのノまマすス他タ

昔ムカシナルル尤モト我ガのノ考カウのノ此コノ辨ハカやヤん

一品

まマヲヲ折オルル乃ノ空カラ以ヨりリやヤ其ソノまマあアらラ先マヅ

奉白

誰タレ世セよヨうウ治チ郎ラウ才サイ投テしシかカらラつツるル

考活

重オモシ伍ヒ 廿ニ五ヒ夕ツキ

昔ムカシ把カはハ競ケ曲キョク中ナカにニ糸イト折オけケん

奉白

粽チマヲヲあアらラむム鬼オニ乃ノ尸カダシ

其角

龍リウヲヲよヨめメ白シロゆユえエのノ治チ荒アラむム

松満

御歩みかろき雪の山梅
錦干ス木此間の月老すて胃
首乃乃菌子猿疵ヲ吸
扇をへく船旧都ニ歎きけり
漢笛ハあれと愁きぬ
志を松娘のうつと云出さぬ
到ぬまゝに成て旅寐し
情あふ不破の関原乃小奇り
むりつば江戸よかへ寸道心
菰柄乃鉦本をとりし重りぬ
破蕉老いしを化をぬる寺

白角 白角 白角 白角 白角 白角 白角 白角 白角 白角

懈ひとり月成窈々の淋し
詩人の餌乃鯢魚ヲ憎しト
花ヲ啼美女盡を江戸投て
あひくく舌ヲ柳をどか
世を蝶と道公ねらひ定めり
骨牌ヲ飛を川子流しつ
三線ヲ十市此里ニすゆス夜ヤ
あゝ裂ろ妻の目
袒母ハせく撫ハ流石を衣とあり
法利ヲ殺は是雪の咎
春を盗ハ梅ハ破戒の具一ツ

白角 白角 白角 白角 白角 白角 白角 白角 白角 白角

鈴虫をのりつゝけり寝ぬ夜式
昔川鶴乃うさ菓や坐兩
此をかく鶴氏床子鎌うり
まゝさるゝ富士の決りり江戸懺
ちりめんを簀此けしゝさ、昔妻
世此あやめんや菰くも名な燭たく燭たく
粽々りん驛いまゝめりり此の月を
行田乃うゝ此こゝまゝりし
川峯が子の白のひいららとと
うと桶や行くて波乃晒サシ白ツク

飯白 樵花 云笑 長吁 才紫 嵐雪 其角 自悦

時鳥の二声之声

地つとけれ

五月丙此端居古此平家うう句りり
正月るううぬ小田一糶とりり童
満ミツ相イ乃夜や換カ総ソウ名五月丙
履イ盆コ子コ折シ田奇のカきキあアるル簀
のらこ折シ姫ヒメのノ多タ訓訓
亡母を愛アんンる

嵐雪 飯白 柳與 香奈 言片 洗口 鹿童

蚊のこゝろ一舟校のまゝり雷の七
蚊すちりり露の園亦れり
夏夕のまゝり草葉に舎り蚊をる
蚊を扇くや麩娘の園乃松夜
蚊のふるまひも小雨の夕へは
夏夕夜にせりあき杖乃松夜
響く一く不破の塔の此紙帳式

和古詩

瑟瑟燒くみ露を煮る夜酒淋
谷木の鬼おそれるも一畝
うらもみは鼻やうのすやも一山

子堂
翠取
菖白
其角
寸若
杉風
鼓角
其角
同
宿

とれ人を螢火火とまゝに云れり
草の戸に我の葉くふあゝるる分
うすもみは羽織細うけあゝるる分
岩巻栢を宿あり顔の螢う那
あゝちりり地菫の園法同ほる
女恥けり螢法まゆる毛山一うや
去此火や螢けりうらるる格涼
たの昔一夕蝙蝠けり涼之風
うらるる此涼くや髪干女夜あゝる

醉登二階

酒の瀑布冷交の九天ヨリ落ルナラシ

春沈
其角
曉雲
言籬
鼓角
菖白
李下
子英
才丸
其角

雪乃艶 尤勝 水笠月乃鯉

芭蕉

雪の中嶽乃あつきをきめく

禅定や珠敷ヲ薪の香此床

文排

山菜菓乃かきや重さうハ瓦

嵐雪

田家納涼

芋の袋よ令依包ひしあう那

其角

塔うひうろをく濁守しあう那

長吁

蛛の巣子く世濁きか山あ

才丸

柳うしや此くらせう・月しあ

茶素

むらぬの木陰ぢうせいとくろてん

拾遺

楳や花鳥さ蝶の世さく酒

芭蕉

けろくは翅は蝶乃娘り如

一品

弁婦はぢれく抱うけまて

汗はくも風きくくへ竹襦半

夕風うむすめとらじん漆森簀

嵐亭

東海や足踏く所ある夕立の面

杉風

水枯く蟬を不断の籠乃声

松溪

木さしや蝶此あけの舊衣

幻吁

夜乃蝶露花さく日向可照

残詞

一品乃宿坊あ

鯨足

日蓮と梢子蟬の唱時を

其角

我者

乞食うぬ天地を着るる夏衣

同

扇了る駭々如也や名夜礎

羽白

唐扇のすひりし和扇の艶之淡固

鼓魚

扇固つるは法師俗の風

嵐飲

破屋おれも傘を月ひす

夕秋の雨もろさるぬ荒屋う那

東頃

翁立る夕白の世りあはれり

一品

夕白のすけぬ居士乃枝朽成

菴白

優婆塞が不動白一や夕白の屯

長吁

荷興十唱

浮葉卷葉此蓮風快色く人

素堂

名うにかぬ風蓮衣を磔りり

そのかさき蓮雨は魚乃見躍

荷いれく母よそふ鴨の枕敷屋

青蜻蛉のそら寸此故蝶々取

お乃まはるる已に盡くをらむらん

去美容美女湯あくるそく立りけり

若ろうつて散らるる君さすや村雨

蓮世界翠たふ二を沈むく

或ハ唐茶ニ酔せりて蓮乃瓶

一切の舊まけ人をまじひのり

武さくぬい裁屋之けり涼之笛

切妻さくぬいさくぬい

草鞋ヲいづく三ノ徑アリて

法をぬい一つ心雨のほろ子

月出さ日此牛運る夕歩之

え月を饒る市所マの松

鏡刻附乃芥丸カける

八十万笠の靈とあゝあゝ

生姜薬法かきよまきる市女笠

関古字又三五夜乃曲

翠紅

才丸

一品

其角

圖兩

紅

丸

品

角

丸

雁の来つて揚弓を競う人

冶郎よりくさす蓋乃論

金谷ノ泪ヲかきひく

荒しや姑蘇の風呂臺は入

亂往昔古首つるべよりよる

主人の瑞を告ぐ初鶏

花の比類へ連欵賞すやる

梅まじりぬ総系に

地女の杖より深なる帯

小六より祈る郎より水と

市手洗や市園梅此生れぬ世

紅

圖兩

品

角

丸

系

角

品

系

丸

品

垂樹渡江ノ松九本あり
 角
 薰焦てあやむ雷ノ霹^{ヒシク}らん
 九
 もるよ書ヲ嘗困窓の夜
 角
 犬よりにかるい酔の翁みて
 角
 塔^タ等^ツより恥と名^ナ試^シ及^ツ寸^ス玄
 角
 早縮い実り入暖縮身縮つり
 晶
 神をささむい^スハル満^ミ時
 九
 水飲よ起る電下に月孤^コ少^シ夢
 角
 金^{カネ}の^ノ声^ノの^ノ踊^ノう^ノ兒^ノい^ノ川^ノ
 晶
 子桶のりよ^コ考^コき^キと^ト先^キす^ス多^タ
 角
 無^ムの^ノ考^コを^ヲて^テく^クけ^ケ茶^チ此^チの^ノ道^ノ
 角

花を世よ何處とぬ山の浅黄^{シヤウ}法^{ホウ}
 角
 心^{ココロ}より^{ヨリ}す^スこの^ノ劍^{ケン}お^オさ^サる^ル 扇^{セン}
 角
 灯^チ前^{ゼン}乃^ノ夜^ヤ話^ワ酒^{シュ}と^ト奴^ヌニ^ニス
 晶
 あ^アの^ノに^ニ胸^{ムネ}を^ヲ四^シ乃^ノ図^ズ兩^{リヤウ}
 角

年の輪比半をひびる名越^{ナゴ}う^ウ夜^ヤ 翠^{スイ}

花^{ハナ}の^ノ世^ノを^ヲ何^ニ處^ニと^シぬ^ル山^ノの^ノ浅^{シヤウ}黄^{ホウ}法^{ホウ}
 心^{ココロ}より^{ヨリ}す^スこの^ノ劍^{ケン}お^オさ^サる^ル 扇^{セン}
 灯^チ前^{ゼン}乃^ノ夜^ヤ話^ワ酒^{シュ}と^ト奴^ヌニ^ニス
 あ^アの^ノに^ニ胸^{ムネ}を^ヲ四^シ乃^ノ図^ズ兩^{リヤウ}
 年の輪比半をひびる名越^{ナゴ}う^ウ夜^ヤ 翠^{スイ}
 花^{ハナ}の^ノ世^ノを^ヲ何^ニ處^ニと^シぬ^ル山^ノの^ノ浅^{シヤウ}黄^{ホウ}法^{ホウ}
 心^{ココロ}より^{ヨリ}す^スこの^ノ劍^{ケン}お^オさ^サる^ル 扇^{セン}
 灯^チ前^{ゼン}乃^ノ夜^ヤ話^ワ酒^{シュ}と^ト奴^ヌニ^ニス
 あ^アの^ノに^ニ胸^{ムネ}を^ヲ四^シ乃^ノ図^ズ兩^{リヤウ}
 年の輪比半をひびる名越^{ナゴ}う^ウ夜^ヤ 翠^{スイ}

改秋

初秋の風かゞり白く青西風 東順
初風は此方り菴もあまにたり 濁子

梶乃繁年小くさかきと

我や来ぬひそ夜より系天川 嵐雪
其角

若とりの衣乃おもて足と首

顔去ぬ契の草は志のふりて 同
雪

治郎打りと少ける 夕夜

磐月よそぞつる再乃遠恨ミ 同
雪

河まひ泪捨ぬつて

寐を獨りをも食うも菓を中へ 同
雪

あまみ一把と巻乃移草 角

人待や人うれしや赤椿 雪

蝶女うくれく蛇目さありり 角

らちくや国啄を此白うけり 雪

敵よおきて籠のくひ戸足 角

いそぎ思し陸乃怒やまへん 雪

色こけそ京々初秋の奏 角

整ふとも心影ふく乃文くらり 雪

家くの月尺あひは琴借れ 角

新しとて花よりせある小神武者 雪

美山の笑ひ茶旗の風流 角

鸚鵡能 呻り 汝を 知る 是 鹿

叶しぬ 志を つけ 清 水

山城の 吉 孫 木 び 松 も 松

菱川 さう 乃 吾 妻 伏

狂 哥 堂 古 松 を ね ぐ け 乃 終

さう へ 酒 々 凋 じ 乃 仙

簾 を 焼 ぐ み ぞ れ ぐ 心 君 意 甚

才 考 孤 舟 女 房 さ じ め ぬ

螢 金 か ら 一 へ 乃 人 背 平

松 虫 ま ぐ 守 任 あ れ の 宮

あ 神 衣 折 ぬ 葛 乃 乃 乃 乃

雪 角

雪 角

雪 角

雪 角

雪 角

雪 角

雪 角

雪 角

雪 角

雪 角

暮娘 月 乃 乃 乃 乃 乃 乃

若 流 と 秘 あり の 乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

雪

雪

雪

雪

雪

雪

雪

雪

雪

雪

雪

二星私憾とあり乃娘年十五
其角
雪朝
角旬

は家取ぬ嫁星は赤袴衣かきんす
 世は此阿房さうひの空や汚し川
 妹寐さいうも窓文く根漢白し
 夕かも星あひそめぬ色帟妻
 誰手向く情やとね持つへ
 胤尾艸や箱蓋はやく世の手向
 たらり火や定家の烟十文字
 玉奈ル里や檜刈男香炉くく女
 貧せこり初あ寒し葛羽織
 臨素堂秋池
 風秋の荷葉二扇とくくく之
 鼓角
 揚水
 松濤
 雨椿
 拾遺
 菖白
 其角
 松濤
 香室

和角 夢螢句

あささくふふあささく食らぬねとと哉
 あささくふふあささく身をゆく明火
 鈴身乃曉をもち犬の声憶し
 あささくふふ傘于てつとねどそ
 藤波ひけりん友とくつとね
 萩の音の愛化咄しのそとそと
 鈴身くくくくくくく
 さかり久くくくくくく
 脚歌を感して
 何さり布き仙洞様を命り那
 其角
 芭蕉
 菖白
 樵花
 曉雲
 黄吻
 暮角

三ヶ月や物鳥の夕へつをひん

芭蕉

讀居

象浮カガの月や流人のよすけ

琢菴

月子飢ウツて旅人古々の乃るヲ臆アヤシ

鼓角

月ツキにツキり家婦イハの情のちろり式

杉風

昼のツキめりツキるん三輪の森

東順

月とツキ越ツキ海の小若木ツキ下女

其角

多ツキいツキ日はツキの月ツキ此ツキ寐ツキ衣ツキれ

四友

牛吼ウシノく山ツキ嶺ツキ々ツキ斬ツキるツキる

柳真

月ツキヲツキ於ツキ征ツキ人ツキ首ツキと酒ツキ錢ツキあツキる

山店

弓ツキカラツキ西ツキ々ツキよりツキるツキ秋ツキの月

明治

何配祈ツキるもツキ冠ツキあツキるツキ国ツキの月ツキ兼ツキ女ツキ弁

富士の月ツキ式ツキあツキるツキ足ツキ々ツキをツキ目ツキ後

疎言

故寺月ツキのツキ狼ツキ客ツキ成ツキ地ツキ々ツキりツキる

北鯤

月ツキはツキ親ツキくツキ天帝ツキのツキ塔ツキはツキ必ツキしツキか

才九

舟中吟

了ツキ足ツキ女ツキ船ツキやツキ木ツキ々ツキ々ツキ掉ツキぬツキる

杉風

芋ツキくツキつツキ尻ツキはツキこツキさツキうツキくツキ々ツキ音ツキ々ツキれ

三峯

片ツキりツキ肌ツキのツキ月ツキはツキ曲ツキ角ツキあツキらツキりツキけツキつ

友吉

芋ツキけツキるツキ裏ツキ鞭ツキ月ツキもツキマツキせツキはツキるツキる

云笑

やツキ記ツキ若ツキ松ツキ白ツキワツキクツキ里ツキ乃ツキ桂ツキ々ツキ那

翠歌

四ツキツツキ子ツキ亦ツキ々ツキマツキ賞ツキうツキるツキ人ツキ月ツキ見ツキ川

菴白

乞食の筋をソける世社
 めんご川傾里の垣のやうそ
 こつ路をゆるぎし降ぬちや
 片まくの螢は舞りまじくらえ
 鬻行のちみと下官哥よむ
 りぬ杜み羨湯治山中一夜雨
 看かきか炉子三線ヲ煮ル
 朽坊は化抱ぐりヤはか
 まをんかめす獨り夢れ月
 移りゆく業平くす薄くげ
 夕へを契る情鈴の木偶
 吁 角 楓 吁 角 楓 吁 角 楓 吁 角 楓

進めする錦木供糧立おろす
 地蒸は粉ふ 藪吹名白粉
 三七日ハ亂壞の相を啼鳥
 食腥く出る夢れり
 奮惡の熱ハ花は色若し
 毛虫ハ蛇の孤々争ふ
 稱磨歌妹乎雞時乃羽
 多々幾晨奴良乎加毛
 松風乃里を叙す。くれ共
 芭蕉庐ノ夜
 吁 角 楓 吁 角 楓 吁 角 楓 吁 角 楓 吁 角 楓

墨深を 疋鼓又隣る 石の那
 亦此里 賤り夜多此 火舟う取
 物数奇此 世持きぬく や萍菴
 石昔を つ川の 落平う 法一 翁
 うつらんて 艸刈 鎌を 途一 之
 艸化一 こそと 飛つ 略の 夕へ 火
 傳よ 曰 箱 負鳥の 一く べ たり
 兼うら 多く ます ちれ 於 芋刈 男 也
 故 芋子 初々 夕 秋の 夕へ き 見 あり あり
 けられ 山 賊 多し 業 山 子 新
 車 場 三 句 句 菊
 其角 其流 愚心 菴句 執落 四友 子堂 嵐 子英

風菊 蓋 笠 冠 止
 有 蘭 簪 菊 宜 止
 俳 門 有 芳 菊 止
 花 止 止 止 止

賀 成 つ ぐ 花 ち や り へ 人 小 菊 系
 籬 介 の 硯 菊 と あり や 芳 一 寺
 菊 の 山 後 ち かん の 書 成 櫻 くり 人
 似 蘭 此 ち ち り 初 ち 一 床 の 菊
 千 家 の 騷 人 百 菊 の 余 情
 菊 ち ち や 菊 ち 詩 人 の 質 成 賣 ぬ
 松 乃 美 八 花 と ち ち ち ち ち ち 茸
 其角 其角 其角 其角 其角 其角 其角 其角

嵐朝 芭蕉 嵐雪

庭まき 松茸 尺付 小上戸 熟柿の林から 小きや
ろや 汐木 浅き 柚味 曾の夕 烟
落 推る 雨り さら 暮へ 木葉 菴
栗 栲ハ 磨 壺 秋乃 乃 米 丸
焼 栗や 飛 蔡 月乃 雨
指 虫 此 才を 栗子 啼 ころ いろ
栗の か 藻の 中 此 せ かし け じ
ち せ つ り や り お ち 酒 旗 凡
傘 合 羽 ち 台 つ り 雨 影 ち り や
物 人 帰 る あり 命 式

信徳 一蜂 拾螢 蒼席 仙風 幻吁 其角 ト尺 嵐雪 鼓角 琴素

と せ 此 地 氏 いく たり 及 佛の 日
と かし 湯 木 の 枝 折 ち せ 小 亦
さ び 粘 や つ つ を 弟 乃 蓼 の 花
衣 則 市 たり 粘 此 弟 の さ び
カ じ カ 此 夕 へ 愁 人 の 探 の 衣 金 釣

遊心寺ノ高雄カ廟

と 衣 乃 衣 乃 石 乃 粉 乃 草 乃 視
板 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
球 の 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

憶老杜

鬢 風 乃 吹 て 暮 秋 歎 スル 誰 ガ 子 ツ

芭蕉 其角 杉風 寛滿 芥麻 琴素

九月盡

新ぬ夜お風才此う池林哉師を此

其角

上冬

僧うかまけり松むるや尺里村の

杉風

まろくも此の山笠せりりて

世よあもも所く宗祇のやう少哉

芭蕉

去るれもるうけ兼枝軒の伊敷此

菴白

あうりう尺りてぬ草舟村村宙

其角

君火燧うき身村の此小神の那

秋風

紫乃暮山は紅のうくく此

子堂

葉拍や凡とてこれおあや乃

冬景

赴泊船堂塗中感

波道黒く夕日や埋むあ小舟

揚水

夕かきうらん虹の倚橋つる山

日

嶺山木の風からんかへり草

其流

冬燈尺を刈ていあきま雲此後

雲

冬水の道此ある人や牛乃屎

卜尺

十月蟋

まろくす前此菓を鳴ゆるぬ

嵐雪

冬虫枯て寒徑我衣のくくいな

子堂

氷くらん日陰の如藤日ある魚

菴白

落葉尺はあき蹄せり新雪

菴白

落葉沈みくくや細豆チツ寒夜
 才丸
 新白く枯雪くくく此を月夜
 翠玉
 号と吹く肝裡に夜の木葉式
 鳥巾
 枯板木のう実あしてかす此
 青扇
 茶此茶や上戸の才 梅乃兄
 菴白
 毎窓の文り短檠の下は釜睡
 杉風
 貧山の釜煮は帝声寒く
 芭蕉
 其角
 松風や炉は富土瓜やく西屋形
 同
 其角
 去炭刻は火箸を并の幽々の
 同
 犬引てくく此指はくり里夜奥
 同
 宗干ふるくく山里を此さび刈り
 柳因

世々くみく沙人うくく櫓住人の
 赤猪
 芥朽くく七世此櫓は造りけり
 赤猪
 老尼の歳オヤの緒やすく夜の櫓ホタ
 赤宿
 雪夜
 佛くく花ささあんくく湯火
 幻灯
 夜着の重く号天は雪とくくあん
 芭蕉
 む瓜心地狸ウサは酔る雪此くく
 麩
 僕り雪夜犬を捲のくく寐くれ
 杉風
 らんかくく寄る在句此法師を此見
 李下
 雪を吐く積投りり化粧姫
 鼓角

富峰

約アシキヲ染ムル人オモルカモ
 不ラ目鼻混沌ノ王死ニケリ
 大回リ磁石ニカクレンカレモ
 富士ウメ寸麦田ハ若此早苗ナ
 シハ富士木綿ハ魚ノケレトカ
 世々サウカ香並者マククルカ
 藤ノハクモカハるゝと藤ノ
 幽戸推テモモモ檀ノ艶ナ
 藤ノハクモカハるゝと藤ノ
 若クモカハるゝと藤ノ
 若クモカハるゝと藤ノ

千之
 鼓角
 空鬼
 其角
 鳳尾
 九十
 拳白
 言色
 紅友
 蘭山
 利久

雪を織てひらりと白く大山根
 皂莢の雲いささかひり
 若此奥岸負くがすくめさくぬ
 書者定離筆ヲアハルヤおの香

峡水
 扇者
 才流
 ゆき

旅行

城乃々々合羽ハ重一若此昏
 杉原ハ飛脚ちのくく香の昏
 香の薪牛追おり香つ々解
 書此犬箒又かくや 狭捨山

信徒
 一品
 文排
 四友

憶李白

月ヲ尺テ東坡ハ雪又才投ル人
 才九

顔淵の麦食愛のひそつて

菜菔アサキと葱アサキもあつて

任ユキすむ紙ユキよりははるる

贈吉原升ユキより乃里

花ユキ平ユキ漆ユキと磨ユキ賢ユキはつと

董ユキをユキ和ユキ壽ユキの撰ユキ筆

永ユキさ日ユキ也ユキ披ユキ布ユキの上ユキ下ユキ胸ユキあユキのユキす

乃ユキ埋ユキ心ユキ儒ユキ乃ユキ尸ユキ

今哉ユキ角ユキ天地ユキとユキ搗ユキのみユキ破ユキる

軒ユキはユキたユキつユキてユキ睡ユキ洞ユキをユキ入ユキ

葉ユキ荒ユキやユキ孤ユキ離ユキしてユキさユキけユキる

卅

堂

角

九

堂

角

九

堂

角

九

堂

虛栗三十八

河艷は貴妃の侍を恋 子堂

遊の代乃小哥を琴は閑思君て 其角

早苗車を喜雨臺より川 丸

カルの子は感あり栲の花盛 堂

竊すくしいが濁す日の陰 角

秋風は名勢が待乳山すのみ 丸

瞞人出家ヲ あり夕へく 堂

縮書はめさ又は弓の才ををとす 角

魔境の月を睨くくして 丸

山寺も甚をう川凡の古寺は 角

茶僧の首烏豆ヲ 啼 堂

虚栗三十六

頼瀧の菱食愛のひとつりて 丹

赤藁の七葉も ありつる 庭 堂

任ふすむ紙ユもろりははあふぬ 角

繪吉原丹羽よりりり乃里 丸

花平漆は悪磨賢はちつとると 堂

董をくくくく和哥の撰算 角

永き日も披布の上下胸あはす 丸

くくくくく埋む 儒乃尸 堂

今哉角 天地を掃くのみ破る 角

軒はかきして睡洞より入 丸

葉茂や狐離して 笑くける 堂

名城抄は蓋を形す月
 金堂のりは夕へさやうにも
 今伶也すうれく玉虫を蘇
 とくま州あり平山はわれ侍人
 文幣うけは積屋の屯垣
 絶りひる燈の着ぬく下西子
 赤さつ男の奴みをもやあ流
 誠より財富もあくちが人ぬきそ
 引出書は人する山原屋でさ
 花道の丸若は尾止れをわら
 賤やすしひ鼓長の葉さうら

九角 九角 九角 九角 九角 九角 九角 九角 九角 九角

虚来三十七

まう借ひ新すべしめり氣遠々
 俳諧童友らうめり里
 靴是破戒救生
 飲酒まもとうり此子
 妄語
 靴を煮てうめり賣世此彰き式
 偷盗
 賊心や河靴ふ迷ひの代ころも
 邪淫
 妻ありぬあぐな憎きそ小物衣
 うぐ干や栴有人蔥乃うみ白

一角 一角 一角 一角 一角 一角 一角 一角 一角 一角

一品 李下 其角 子英

腰ぬけや三とをもちぬ狗の匙
 拵ぬれしやぐを湯婆の瓶に
 人何ヲカ土肉の毒をナル
 卿むらり雲よそん人くるまき
 怨啼て涙漬氷る丸をうけ
 夜學感
 鶯氷ル夜や燈籠灯蓋子羽と因る
 酒氷ル寒菊を我
 一令
 蕉花
 其角
 芭蕉
 虎吟
 冰若く偃苗が咽とるる何とあり
 暮よあらしまうは氷板哉
 其流
 嵐雪
 友有
 四友

閑春をぬす人をさし言は梅
 軒の格梅を揮るに如月つし
 る扉ヨリ水仙の香ハ已終り如
 雪は初くあ仙此勇駒一
 師走の月と
 其流
 嵐雪
 友有
 四友

冬は水白髪遊女乃 国の月
 寒苦を孤婦の袖と鳴る哉
 寐させぬ夜才ヲ鳴身此寒若僧
 貧苦を明日解つてうとを何と
 入お此のうとを何と命うれ
 鷹及て俄神楽や里乃 森
 其角
 才丸
 其角
 甄落
 云笑

林舟舟濤の嶺乃内火白くけ
折角 柳角
ミツカ 引芽根のうり雪乃角
角止

一平三百六十日

開口笑無三日

飽やこしち終と印乃轟と
李下

世々白波子大根こぐみ
其角

月雪以芽のあも戸や枯つらん
同

かきろきい書よりみぬス声
下

百才あつ瓶と秋をちりさめり
同

傾婦を蘭乃肆よりる
角

敵ある国此を代のうり草
下

鳥少の天下一番の鳥
角

又盲か金持の金を認テ鳴り
下

かきととり胸をうり春の
角

其池以悪字とりのうりびを交
下

士出峰の事代金心加賀殿
角

初めて國の子夷此後刻
下

名うりいかに黒木串材
角

髪ありのむみる男内ゆり
下

春青君とくりあひのあ身
角

月日鳴く生傍のうり乳上戸や
下

廣集三十九

薄も白くもあつと川を強
物にたすけ移れしへん
院のほろのあつと形を宿
於進ま島原小地とあひ出る
仕舞をとくす八重のしらみ
墨深ま女房うらをむむ式
結もねりも一蛇とあつ
節よらお體骨何をその情
と徳人の鬼は泣くむ
月社かうらを睡る膝のうら
結のぬらるるお深もねり

蕉

蕉 角 下 角 下 角 下 角 下 角

取もぬ僧を笑あつて
山崎傘を舞
笹竹のよつと風は深し
竹場乃重なりあ飯を忘
一乃娘里の庄家かき養ひま
軒名もつと云匙を責り
わくまは怨の霊と啼り
う泥世よ沈む寒食の瘦
沓も貪重し一笠はさん俵
芭蕉あつと蝶下 尺よ
腐しる俳諧犬もくはらや

蕉 角 蕉 角 蕉 角 蕉 角 蕉 角 蕉 角

飄ハル

入の近づくまに初ハツ砵

わくひあんく葛うみほ

嘲ウツクリそ黄金オウゴンの鑄コニ

小紫コムラサキ

凡ソレそ夕タへ切キ篋セツ灯トウの記

醉サケちぬ夜ヨの格カる時トキを憐アハむ

夕タ月ツキ此ココ前マの調テウよりをシはく

金カネ橙ダイダイ徑ミチは鞠マドくみと思オモふ

葉ハ生ナ姜カウを世ヨにぬやいさくん

楮コ評ヒョウかづる葉ハ堂ドウのカお

角

蕉

角

下

角

下

角

下

角

下

角

卷四十一

寸ツチ法師ホウシ切キレの衣イ乃ノみカら

昔ムカシをカム卒ソツ於オ路ロ大ダイ小コ

行ユク乃ノ多タ門カドを乃ノを花ハナの雪ユキ

凡ソレま三百サンパク人のカも

凡ソレま

酒債尋常往サカベ處トコロ有アリ

人生七十ニッパチ右ミダ来キ稀カ有アリ

詩シあきんど年トシを貪ヒル酒債サカベ哉ヤ

冬フユ湖ウミ日暮ヒノクシてカ駕カ馬ウマニ

于ココ鈍ノボさ夷ヒ又マタ関セキ公キミゆスん

黒クロ鯛タイくクおオくク女メが乳チ

芭蕉

下

角

下

角

下

角

下

角

下

角

下

下の品ふい眉こもり 執るゝの娘
娶ヨシワトシ姑のふけえ何くもいをあ川
かみ寺の児歌舞のふ店此時を
持自 中比う飲を飲あふりや川
初心瓜 初うらまぬんと飲
其話 震動 虚實をわつる付 察此
鼎子 句法 煉る 龍の泉より文字
と治る 是必 他の考かゝにあふ
ゆの 察ふり 多は乃 盗人を待

粟とりの一書其味曲なり李杜、
の酒は嘗て寒山、法師を啜る
るは子伝る其勺みたるをに、
すめき

院と風雅のそは望はあゝぬ、
山ぬ公考りて人の拾はぬ、
魚乃情つゝわたり昔き西施の
あり神妙カキヒ教黄金鑄カキヒ上陽人
乃室の中はる衣櫛は鳥北かゝるこ

下の品ふい眉こもり 秋さひの娘
娶ヨシキウ姑のふけえりゆゑを
かの寺の児歌舞のあり此情を
於白中はう飲を伝ふりやい
初心は松カキヒと

其話震動虚實をわたり、
鼎子句は煉る龍の泉は文字
と治る是必他の考かゝるあり、
沙の響あり、
乃盗人を待

天和三年仲夏日

芭蕉洞桃青鼓舞書

[Faint, mostly illegible handwritten text, likely bleed-through from the reverse side.]

天和三年

前山

去歲病中... 本堂山若温泉... 念二招...
... 志を得... 水...
... 野を... 春...
... 曝...
... 乃...
... 水...
... 鱗... 旅亭...
... 温泉
... 山の... 之は

家... 復... 盆... 子... 山... 水... 文鱗

雨かきよま妻れ穂々々々紙幟 同

くわりのうに先きやまこせ波志まこり

岩根こす 韃子鱗あり走鮎 其角

つらつ枝をゆる水のむ穂よけん 枳風

傍り薬師堂あり朝々暮々に此僧杖訪る

序山恥かぬ笑をむく大原の十如院川

雪かきくもる三日若つれくもる古入乃

あふに祇長基依の能をゆるくゆるり 世々大原三吟と云

我等三人かあるる温泉ちりすいすまれ

水くちりすく 世々大原三吟と云

其一

志くくや早苗より入る寺の門 其角

奥一のおあきくの鳶尾の下が脊 文鱗

宗長乃り名をむせ月映る 枳風

其二

涼く痛き本此るの星若光火 枳風

水札の穂多ひぬく山あり 其角

柴人よくとくぬ宗祇何やん 文鱗

其三

菅菖蒲あり水くく若螢く乳 文鱗

驛の蚊遣杖策賣ル多 枳風

椀井の枕をさす旅寝く 其角

身中意の三業法報應乃三如来也
すうちういそと醫王堂前奉掛干時貞享二年 丑月日

五月雨多比の字乃ゆる日数ノ那 文鱗

さみずけや湯の樋お山又燈けり 其角

此山まつさきくまの此野ありさやまはと

ぢりりいゆるいゆるぢりりとさきよ

考よりみゆる灯の花乃曙秋風啼猿うさ

の鳥すくありねね何一奇石怪松んと肉

さし母あはれ

奥や滝中よ海さき谷乃夢

宗祇ぢりりさきとさしゆる我か芭蕉翁の

山路多き何やうゆー 荳州

千載集 山里はほをりくさきつけのり人おはるり

とろくろいさかれくはまつあて

菴三ツ敷をまきぬた山ノ那 文鱗

蛇住ニく芥にもゆる 樗ノ那 枳風

いっくさく肌をも世をさうさみはよけ奥

そをれさちりあつ山中人客あつは奇哉

むておす

多きい海を忍びけり 鯉ノ那 其角

照射みな念仏の上も誘けり 枳風

月清集秋の聲又書さる麻衣さうせり山猿の

舟の情なくとも 鍾倉若隠士未琢は山も来
る才まうりけるよー 寂あゝー 此もれりり
ゆるに哀ありて 其句むろりんといひ
ちと短冊をのさせり

本朝入湯の比ある人のもとより九献
おろしとけりをもてあまのいさ

はくく本者うよけきく酒樽名
をたぬまてたりにける哉

浴日をつんでたうりぬま宿あゆまろく
にうく根風は根日敷たしとく 芦の湯子
ありとあ後澤は泊りとあた江のつ子

清信の所思

墨染の浦の鯉若簪情すん 文鱗

懲雨の嵐坐頭一曲すえ終く 其角

汗ぬ腰裁を通りゆるとく 由壬よかろり

隙すか足厨斗を煮寐花五月火 其角

新長谷寺に詣る

志帆汗帆 寺の嵐に涼にけり 文鱗

漁歌やまろひ酒作とれろろかこまろ若鴉

にもれろちりり 昔る旅人も旅のあられ

もろ月さねけるちりり 晴の長明燈のまこやと

いふ所あまににろろあまれすはぬろと

うたへし 旅人のかたけき

志とろねる 芦花まのすも 文鱗

蠅たぐい 一をねねん 其乃兼 其角

露々 罌戎 稱一 五山 三つくのすも

先達長寺にい 或曰無詩俗人

寔に 諷なり 我は俗人 友木立 其角

名を均ぬる 此涼 文鱗

園光 入 兩山 佛光 禪師 をおするに 所

か 常あ 手 野鳥 肩 野鳥 肩 野鳥 肩 野鳥 肩

む あり あり あり あり あり あり あり あり

す 侍へ 侍へ 侍へ 侍へ 侍へ 侍へ 侍へ 侍へ

よ 白と 龍 二の 三つり 架ゆ 木を 白龍を

たり 谷 虚の 山 杉の 山 杉の 山 杉の 山 杉の

る 物よく 我す 澤庵 和 尚 若 相 山 順 元

せ 了 了 了 了 了 了 了 了 了 了 了 了 了 了

法乃 色 空 乃 蟲 乃 巖 乃 那 其角

常 燈 木 の 豆 房 茶 み 乃 也 袴 の 裾 文 鱗

か かり 梵 千 大 巖 和 尚 の 名 牌 を 礼 其角

彼 衣 高 の い ま り か り け 世 公 抄 人 宇 山 上 り

百 六 十 二 世 也 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

ウ 下 に 擅 一 箇 毎 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

の吳山紙懸一具の紙遊は自然の妙を傳え予
うの目を奪ふを敢て舞うたかたふりうり
歩みも紙法書を耳に妙き傳へる負き原千也
多病抄子にいとちと一貞享二年四月三日
はうちせとを山に柴屋の空に中は消かきま
たふらふ清名世は勝せ給へんを舞舞しや
賄ふ富り志しれども生れ一盃は若菜湯少を
たう一と思集み外一粟は幻吁とぞ見えは
市向を去る人も涙のくろくをくろくや

三月月若命あやなり一雲北極
其角
花洛は濱川自悦といふあり東川の比被和志

はまみろくかりうたはくは法をうりしを
きり予吉の京はありてと母は寒山う笑は
とげぬ和尙の法化を告りりするにむさひ
志のへとそ社のいり北法をとりかへし
浪花はたに黄泉の練たる人 自悦
草枕月をうりてのく森命恙なく今何と
帰るはたは尾陽斐田はははは休の言あり人
ふあよ昔も園を寺大巖和尙とて陸月の神
め月をい原のくふはは梅のあはれは和て選
化し者もあやうしをやうふすをある旅といひ
常やといひうりといふうきりたくり長北宿に

才の跡先一輪投れたる色

梅の影く卯花ぬらむさう非

四ノノ五日

其角雅生

此の事文麟亡父若日抄の道の日々此草
堂又抄を刊す

梅の影く世花小夢をこころす 文麟

とくくくまきりぬわつらむ旅寐と心も切ら
いふうわく名も夢にありてはるる金次片の
よけまはもくうらむかきし月を照すゆく
東奥の月日まはるる旅をたぐひもあはれ

貼るかの富嶽の奇秀をさくはむいん
海峯孤徑黄金をつむへく見えたりと
は湯伝ふうらむ茶久人抄をまは

一時ん若とくしる人もあはれ
能化堂まつくし傳をいふなり 其角
鳴くや梅の影く卯花ぬらむさう非 文麟

狂雷堂 晉其角述

虚無齋 鳥文麟抄

十亥郎 川蚊足筆

其角雅生

乃少文麟亡父若自好乃道の厚く此草
堂又おをりて

掩ぢらるゝ世花小夢をこゝろする 文麟

とくくまきりぬわつらふ旅寐と心も故
いふくわく名も歩はあまゝにさぬ金尺片の
よけまはとくくうらとかゝるはを肩えゆ
東奥の凡月をいづれをさぐりて

財せくかぬ富華の奇秀をさくはもいづ
海峯孤徑黄金をつむへく見えなれと
は湯衣とさくさく茶を人かきまは

一時ん若とさくさく人もあは

能化堂妻つく俾を糸まうね 其角

鳴くや精れぬらよとく 文麟

狂雷堂 晉其角述

虚無齋 鳥文麟按

十亥郎 川蚊足筆

附尾

昼秋を駒千代の面をささりて
たつらふささる 夏を湯炎
舟積んて野渡に移成致らん
毎折管隊言此岸 勢
月や輝る花散る 籠はたぐりて
あも 雛持ッ娘のりゆ
春の雨揚屋は志ある思ひ也
おみとあまに女のちちへ
大将を士卒も同一日若命
芦の江ゆりく埋む 扇

李下 文鱗 其角 蚊足 鱗 下 角 足 下 鱗

二

津玉や和泉の同と淡路しま
踏一はに法矢 初教
赤食をそ代の曾我の親法師
星小もかきぬ下若をあり
月をぬく秋を桂の福あり
露をて時友宮司 灯を繼
もろり 檣のを食とこれらん
牙延やつらと母の福あり
舞一夜麦刈は若宿り
雨の林乃批把折りゆく
引やふふと吾人の高北土車

角 足 下 鱗 角 足 下 鱗 角 足 下 鱗

世を尺る今の山場乃京
 鍛冶の推斤肌ぬるに鳥帽をき
 丸くうろ先ふ舎替此年
 吾系本がきの涌泉よみり水とい
 白らねぬ櫻をひらうたのこ
 麻氏吉成乃の酒屋よす後う
 三人の傳此史を語る月
 男山表八向をのこけり
 断うまう九城よ杖つく
 くらそより後最座あといひりて
 涼とあつそむむや水のこぞ

下 足 角 下 鱗 足 角 下 鱗 足 角 下 鱗

観書へ寝よ来る鶴乃る影あり
 竹の影に 右麻の帯まけあはま
 くら垂舞の花のこぞを以てをうけ
 宗祇宗長柳ささるり井

下 鱗 角 下 鱗 角 下 鱗

花つみ

とん堀に三幸一は事や母乃ちよ法すかりしよ
可也とつる妻姑も出ひをさそほすくま
うりきねを思ひを是中一せく心き一哉
手向作りしと里彼祇云乃一とせ此日法を
縁句法くはつれうし海山の情をみ法
あもまをさる精法禱讀佛系をるるよ入中
乃み井中ひあし結ひらんいそ家んお々の
人のまく形まおしく耕とのゆかすつく一
互面句よみあられを花摘と名つけゆる也
その日まをねのらん軍此向く結縁とあし

宗廟吉事帖
とん堀に三幸一は事や母乃ちよ法すかりしよ
可也とつる妻姑も出ひをさそほすくま
うりきねを思ひを是中一せく心き一哉
手向作りしと里彼祇云乃一とせ此日法を
縁句法くはつれうし海山の情をみ法
あもまをさる精法禱讀佛系をるるよ入中
乃み井中ひあし結ひらんいそ家んお々の
人のまく形まおしく耕とのゆかすつく一
互面句よみあられを花摘と名つけゆる也
その日まをねのらん軍此向く結縁とあし

予々向此下よこねをとり那〜
若にさすひとと申ぬ言は信師先歎
をわつりさすあまの日記たれと申別

花つみ

八日 上行寺

灌佛や暮るく世くろく獨云

屏古とやいふ

身とくはあふ印をや母の寺

九日

むく雨や露山を多し〜好み草

偽釣雪かたりけり

此里こ〜病ま〜〜〜まを此花

十日

紫休の〜〜〜〜〜
〜〜〜〜〜
〜〜〜〜〜

一灯礼 其角述

彫棠

角

雨黒

露丸

望女松の心三入行 拭

角

十日 望女松の心三入行 拭

郭公舟入舟に大花芭蕉書

同

二月十日望女松の心三入行 拭

山吹花を望女松の心三入行 拭

清水寺
僧行舟
幽水

非情花を望女松の心三入行 拭

山吹花を望女松の心三入行 拭

十日 東叡山院

僧心の望女松の心三入行 拭

角

十三日

けしき花を望女松の心三入行 拭

同

十四日 倭草川遊

風土記の望女松の心三入行 拭

同

十五日 雨

紙合羽の望女松の心三入行 拭

同

十六日 望女松の心三入行 拭

馬牡丹の望女松の心三入行 拭

同

十七日 望女松の心三入行 拭

壯能の望女松の心三入行 拭

同

盛白子の望女松の心三入行 拭

秋色

山様 実をとりてもぬきとふし 彫棠

十八日 雨

白露を石葛^{ヒキヒク}に持り 價^{アタ}ありし

角

十九日 自愧

夜あつたを母痛さうきも水鏡

同

自棄

下帯やゆきをたうたに知ると

土田 玄素

辞世

夢あれやと死きぬ日乃うら風

申良 正春

廿日

あふれ心草^{トク}細織とくま

角

廿一日

射者中^チ突者^{ツキ}勝

幌^イ赤き何そ^チあふ家^チ點^チ公

尼 同

廣庭^ワうりゆきふらうく牡丹

尼 智月

藁^ワとらふやとらふん寺の猫

女 同

藁^ワや藁^ワ之^チに種^チおる

女 さの

廿二日 佛骨表

志^シつらう^チ幌^チを赤^チらうかん^チし

角

廿三日

申の日^チも^チあつた

おろしん糸^チ性^チに^チ入る^チ者

同

修^チり^チし

家^チの^チは^チも^チあつた

久^チ若^チ 柴^チ骨

物くけり漏らるる〜海舟
繩さざくんと帯ううひひぬひ

揚水
全峯

閑居

ちやつひにせむひさつと古宮の
ちやつひにせむひさつと古宮の
ちやつひにせむひさつと古宮の

我下りた何をさのふま摺 魁

ト宅
奥口

山鏡る山峯此松のふも思やうお

同

心くあ〜れや〜海をよみ立

野狐

桃の葉おこや〜形は夫のし彦

知津

果るる浅詠も梅中をさかりか

廿四日

宗長乃句をとりて

橋の〜川を路とせ〜れ

角

花をさるる人の一ふさぎを
うらやううらやうとさるる花

牡丹芳中中情める句を申

信
菱菱

廿五日 孝納

かろ志は 親をのけ〜杜あ

角

一時も今この卯月 儂あし

由水

料店昼外

恨をハはさるるちれ菴う那

琴風

庵丁の牛何とこく

きう〜川小鯉をうむ主の非

百里

似城心 似城心 似城心

同

廿六日

會盟

吏乃をめぐり亦く一夏料理 萬

廿七日

短衣や短日はなすも納屋に亭 同

保新へゆく人々

秋のまわりをめぐりあひ津田の草 菖

廿八日 あら人のあ野々し

内川や雪のうら玉重くとり写魅 角

は白雲より池へ流るる脚の
おかしし別荘山旅を 山内川北

奇仙を記しゆく
文禄二年の事なり

首飾や雪をめぐりて 露丸

位高くと人のむきふ反針

川舟を綱とて雲を引きまき 曾良

鶉の飛あはく小名ゆるる二月月 釣雪

津より天をうかへ旅路の昏 殊妙

山も南をとらめくゆく梨 梨水

眠てら昼の懐とてをめぐりて 釣雪

百里ゆる旅を未嘗に中道 翁

山つらひん小樽の記を萬人 森丸

斧も持らるる神木に森 曾良

奇きみの跡去るゆり 釣雪

豆うらぬあま何と啼く鬼 露丸

古津所を寺にあらはれは昔 翁

幕うちあけぬ葉せん 舞

湯殿

澄らきめゆきつらぬく社

篇

月山

雪の峯いろり岩まぐ月山

同

日山

雪のまじり霞くまの雪

釣雪

廿九日

風情思はる圍

角

五月朔日 全二集

きこれくさ月さあれと
きこれくさ月さあれと
いすねさ雨しくと

花ノ七

きこれくさ月さあれと

角

きこれくさ月さあれと

彫棠

きこれくさ月さあれと

溪石

けいりくさ月さあれと

扇

けいりくさ月さあれと

去来

けいりくさ月さあれと

秋色

けいりくさ月さあれと

篇説

けいりくさ月さあれと

洛下落神舎去来稿

扇く暮ニ出テ朝カクル家ニ居テ人ヲ恐ルハ

八足ノウラニ癡持ケラシ山椒ノ眼小豆ノ鼻齒ハ

糸ヲ付テ小袖ヲ縫ベク耳ハ木葉ノ芽ニ似タ
 リ地黄ヲ喰ヘバ毛白ク大束ヲ嘴ハ口毒アリ尾切
 テ錐ノ鞘ト為ハナシテン背腹ノ色ニ目出テ薄
 モ濃クモ漆出セリ被カブリタル姿ノ若ナルハ
 入ノ繪虚言ナラン筆ノ用ニ豎ヲ扱ルハ老テノ
 後ノ悔カ顔ノ烏魯ツキタルハ晝嵐ナレハ成ベシ
 修リくは身ガ危を思ふと袖と吞半世の酒
 年ひくくはを酒に酔ふと見れば髪を
 そく髪と破るは髪よりくくかじり髪を
 の髪よりくくを髪おる髪より髪を髪と
 おくくかの髪と髪は髪は髪と髪を髪と

花ノハ

海平は乳とぬめ何を流しくく傷人の例より
 是つらに海平の書を流しぬめ髪を髪と髪と
 髪を髪と髪を髪と髪を髪と髪を髪と
 髪を髪と髪を髪と髪を髪と髪を髪と
 髪を髪と髪を髪と髪を髪と髪を髪と

ツクく御身カ貴ヲ思ハ牛バ形フトク虎ハ心
 猛ケレド下坐ニ立リ百敷ノ賢キモ甲子ヲ迎ヘ
 テ年ノ号ヲ改玉フ春立カヘル遊ニ子日ノ御賀
 アリ子祭ト申スイツノ時ヨリハマリケン漢ノ倭
 ノ歌ニモ遠レス海島也と厚塔ノ強ニ住海島殊
 体乃く危甚が事よひつら我朝ノ人ハ野鹿トツ

夕工侍ル麝香ノ扇ハシラヌヒノ筑紫ヨリ外ニユ
カズ天井ノ扇ハ雷ヲ鳴リトコロ乙若ヲ七郎トハ
申レ新九郎門ト云来八月代刺テノ事ナルヘシ
大子等子々々廿日扇月ノ十二ノ子ヲ産瓠ク
ガノ扇骨バカリ誰カ家ニ取尽レ得ンモシ白扇
赤テ福ノ神ノ使センモシス

つらゝ流男ウ危ト思ハ喚レ死地ト云のんて
籠イナも袖イナをふせく海カリよりん若狭ヒロシマに
小鳥よくれんや中ナカをふちあまをさしきいとお
まゆマユきあまや番木バンキを舂ウ吹フ矣小齒コハんともつ
ちる若ハありしナの吹フ扇セぬまニ扇セ糲ト子チすラん

或ハ鈴スズを頸カ小コうけ幸サキりしキぬるさサと小コかカる
とも父母フボよき人ヒト種タネとまマ人ヒト西ニシも此ココ老オシ福フクは
をんもけんケンと法ホウをけんケンづは阿ア小コヤヤんン所
ゆユせセ友トモ達ダチとよトヨとぬヌされレてはハるルと
おオババ一ヒト穴アナ死シして仕シ合カと東トウ坡カのカぬヌぬヌれ
とト生イ捕トまマてテあアまマしシて張テ湯ユのノ文フミをヲ軍イク我ガ
まマ興キョウしシきキ狐キツ狸リのノ命イナとトんンとトてテ焼ヤク扇セと
ぬヌ心ココロでデ勝カチまマしシきキ婆ババやヤ拵カケ走ハ障シ子のノあアり
とトおオ母ハハ帰カエりリとトもモ思オモひヒ井イノノかカとトくクをヲこコ
あアれレとトあアるルぬヌのノ妻メとトひヒるルとトひヒるルとト
此ココちチいイはハるルとトん

名の修る想所を盡し山とあり
 羽よりけしめ羨まれ電と云ひ
 雲よりあそく裕羽織のしけうか
 夢風よりうけおをむれさる
 木下はけしと捨もさるうか
 眞 湖春
 溜指
 曉雲
 巴風
 翁

東嶽山行

大佛をうへてはふをるを
 一略とあひの山を川を流か
 ぞうりあはけしああゆめ
 去来
 尚白

心喪

心を捨てて寂然と門を本と云
 幽也

草の戸と念佛の肉とやり哉
 雁人^{ヤトヒド}をあひさるうか
 初瓜と妹よりいとせん親 独
 御酒よりあふりうか
 蝶風よりさ紫お多き芭蕉
 佛市の願を流さ流りのあふ
 躑とあふ向ひ世にた菖うか
 畑よりさやあふりし生るうか
 今^{イマ}の笛を叶ふ小なる秋の
 六條をさ藤^{フジ}とささるうか
 うあひさるう鬼灯^{オウゴン}ぬくや様^{サマ}の白
 三翁
 一笑
 巴風
 文鱗
 加生
 珍夕
 尚白
 翁
 由之
 風喬
 沾荷

尾柳門主

甲陽軍鑑をよむ

あらしをむむ信濃の武士はまじりか

去來

いもの必中村にありし

秋風 伊勢に暮る 於てし

翁

阿そとまふあしはや 宿るも月

秋風

ありし秋の夜

菊の白と月見のほくは酒を

同

ゆゑに誰もあはれなく 秋の

尚白

西後

半ひけやあはれなく 月夜を

山川

半ひけやあはれなく 月夜を

翁

あらしを

雪の都くつ川大佛のりる 雪

同

水鳥つらつらやつらと 浮と

揚水

物々々々身より 独りや庭の霜

全峯

いさゆゑはや見えなく 断ち

翁

雪の都くつ川大佛のりる 雪

宗流

ちまひ

津とてさかぬ 此のあはれを

凡 凡 凡

雪の都くつ川大佛のりる 雪

あらしをむむ信濃の武士はまじりか

桃園

標佩^{オビ}くわぎとめり少や芝看 嵐雪

年古き人志也や下地歩 漢石

梳^{コシ}る申生心^{コト}條^{コト}乃^{コト}齡^{ヨバイ}う^{コト} 柴栗

日^ヒ止^ト及^ツ浦^{ウラ}く^{コト} 同

地引^{チヒキ}く^{コト}蟹^{カニ}の^{コト}小^{コト}に^{コト}く^{コト}き^{コト}の^{コト}潮^{ウシ} 角

杜^トみ^{コト}是^{コト}と^{コト}く^{コト}み^{コト}あり^{コト}る^{コト} 峯 漢石

花^{ハナ}太^タな^{コト}り^{コト}横^{ヨコ}雪^{ユキ}も^{コト}海^{ウミ}の^{コト}岸^キり^{コト}い^{コト} 百里

み^ミり^{コト}地^チは^{コト}津^ツ糸^{イト}も^{コト}心^{ココロ}の^{コト}帯^{オビ} 穢 是吉

事^{コト}ふ^{コト}ら^{コト}の^{コト}怪^{カマシ}う^{コト}と^{コト}又^{コト}に^{コト}ま^{コト}荒^{アラ}舟^{フネ} 山川

七日 碎^{クズレ}て^{コト}忘^{ワスレ}る

宵^ヨに^{コト}蚊^カと^{コト}梳^{コシ}を^{コト}り^{コト}に^{コト}八^{ヤチ}拜^{イハヒ}式^{シキ} 角

土^{ツチ}の^{コト}け^{コト}く^{コト}ま^{コト}葉^{エハ}と^{コト}保^ホる^{コト}竹^{タケ}多^{タカシ}し 巴山

折^{オリ}を^{コト}ゆ^{コト}く^{コト}名^ナを^{コト}吹^{フク}く^{コト}ん^{コト}蜂^{ハチ}の^{コト}う^{コト} 同

髪^{カミ}を^{コト}約^{ヨク}て^{コト}痛^{イタ}肌^{イダ}や^{コト}ん^{コト}を^{コト}る^{コト}蚊^カの^{コト}云^ク 同

八日 得^{トク}正^{テイ}觀^{カン}音^{オン}像^{ゾウ}

手^テり^{コト}筆^{ヒツ} 膠^{カウ}子^シ志^シま^マ如^ニ白^{ハク}武^ブ 角

師をきく一糸敵志 在 野徑
何より師走の布小ぢくかき 翁

右四句誹番匠之墨槽也
仍駐入競馬之埒畢

五日

花あや光 幟もくけ家あらしめ 角
標佩くわきとめりや芝 看 嵐雪
年古き人志ゆや 地歩 漢石
梳る申も心 櫛も 柴栗
日 止波浦もく 同
地引く 蟹のすくく きの潮 角

杜あ 是もくあけり 漢石
左太 横もく 百里
あり 障糸も心 是吉
事ふら 怪もく 山川
七日 碎て 忘る

宵に 帳と 枕をわく 八拜式 角
土のけく 古葉と 深る 竹あり 巴山
折を けく 左名 ぬく 人 様あり 同
影を 釣て 麻糸 せん ぬく 帳の 同
八日 得正 観音像 同
手り 達 膠子 志 ぬ 白武 角

ぬき佛只身此き免乃五花
枝柿や付ぬるし初りちこ

重則 同

九日 雨

葉とかけくまぬし五月雨

角

下り星る空へつまあき 鶴トビ哉

沾荷

藤下り抄まてうしねま隣うも

同

好物

入歯ハシしんやましーや 瓜 畑

三翁

蟹カニ産ウ産ウ

うりまや虫平むりし草物

と

山スガ菅スガしゆひぬ抄しーや総藤

同

後々志北中ぬかしの 柳ヤナギの葉

同

ぬきかきまこまどしーや西瓜スイカか

魚翁

十 雑雑まきまきの名まきまきく女メくね

同

いさ山山まきまきまきまきく里里林林子子

同

十日

云々まきまきまきまきまきのもの
はれくまきまきまきまきの奇奇仙仙

ぬきまきまきまきまきまきのもの
はれくまきまきまきまきの奇奇仙仙

ぬきまきまきまきまきまきのもの
はれくまきまきまきまきの奇奇仙仙

ぬきまきまきまきまきまきのもの
はれくまきまきまきまきの奇奇仙仙

あまふく非人まきまき 麻アサ蓬モウソウ

角

梅のまやと長谷のまきしけり
つらふ多しむらさき色にそく
功徳をうけぬる

名木を乞食に中野小梅の車
炭焼を中しく細忽み令てく
旅人より難ありきあき層を
その寒くぬるも志をぬけし
土思きりも底もぬりしあられ
秘をちりぬる車に火焼
十一期 聖景
平月松平富士の梅此を後
志をぬるぬり散れしと梅の車

山川 崔雨 横儿 春魚 松翁 同 角 沾荷

山の蟬をさぬけと燃く旅所
いそるの角小あつはし 藤子小
一回見しはあつはし

故郷 柵雪

和くく和松を林と日注光
在原寺
寺柳と我肩と水かみ

大五輪寺

茶摘す

多武峯

新修す

芽わしきり池田八分此物なる

十二日

きみふれ小ヤクく吉野と少山

角

十三日

岩翁亭題送解

みくおや隣へともふ懈カニたる足

同

沙塵揚く水舟うやや好春は

岩泉

野鳥一虫長此更なるい落るる

同

形くくくも歩む川に好や初鯉

同

月さる廻羊ぬきむ本玉の非

遠水

十四日

枇杷の多やとねと角あき蝸牛

角

形うらす少形を枇杷を産地

岩翁

女侍大御と之肩ぬく事野の非

同

言猶と小笠の角之初茄子

菘童

松嵐

十五日

お粉買守知んて一花夕月新

角

朝の葛二十あくとたあつらん

三ヶ

仁おまゝ

門すてらあてすらりて都もり

同

十六日

寺ひらはははは

雲いん川カガ爾カガもカガおカガあカガ子玉カガ雲

角

十の若春の銭

螢ありおたすらん我思と

同
ぬき色もとどろきしうらうら〜ゆきを屋
同

十七日
この社国例あしうせ
けりるももむすしうそむひち
えつけしうれしとまうらひ
まける昔を井中ひあしうせ

羽ぬけをむさるむらりそい〜と務

角

十八日
お年を毎々修し〜と務
お年を毎々修し〜と務

此年を毎々修し〜と務
日結解あしけし〜と務
お年を毎々修し〜と務

同

九日
お年を毎々修し〜と務
お年を毎々修し〜と務

針をうけし〜と務
お年を毎々修し〜と務

い〜と務
お年を毎々修し〜と務

同

廿日
お年を毎々修し〜と務
お年を毎々修し〜と務

涼〜と務
お年を毎々修し〜と務

角

廿一日
市の徳屋のり〜と務
お年を毎々修し〜と務

昔作り葉すす雪まの好やり式
お年を毎々修し〜と務

同

旅人の傍で〜と務
お年を毎々修し〜と務

沾荷

虫を虫守〜と務
お年を毎々修し〜と務

百里

み〜と務
お年を毎々修し〜と務

水花

井け形く〜と務
お年を毎々修し〜と務

梨水

廿二日
夜讀書

牧を打や枕^ク子^クあ^クる^ク家^ク奉^ク乃^ク重^ク

廿三日

雲^クの^クま^クみ^ク能^ク無^クり

目^ク小^ク口^クけ^クく^ク酒^ク香^クき^クく^クを^ク流^ク水^ク鬼

廿四日

孫^ク立^ク人^クを^クあ^クれ^クま^クく

舞^ク好^ク令^ク闇^クの^クき^ク月^ク此^クめ^クく^クる

廿五日

茂^ク叔^ク讚

傘^ク少^ク條^ク蓮^ク乃^ク立^ク葉^ク子^ク地^ク武

廿六日

山^ク田^ク悦^クま^クす^ク

汗^ク濃^クま^クよ^ク衣^ク此^ク背^クぬ^クひ^クの^クゆ^クみ^クあ^クり

夜^ク舟^ク無

宮^クま^クす^ク一^ク橋^クり^ク取^クく^ク茶^クの^ク白^クひ

角

同

同

同

同

巴山

父^クの^ク孫^クま^クす^クま^クす^ク

夏^ク衣^クつ^クつ^クあ^クる^クん^ク老^ク乃^ク腹

同

廿七日 入^ク湯^ク乃^ク人^ク木^クを^クま^クす^ク色^クじ^ク子

蟬^ク乃^クあ^クる^クも^クあ^クる^クも^クあ^クる^クま^ク指^クか

角

木^ク等^ク川^クの^ク材^ク小^ク清^ク乃^クま^クり^クあ^クり^クる

山川

廿八日

井^クの^ク水^クあ^クる^クい^クと
砂^クの^クあ^クる^クい^クと
い^クけ^クぬ^クつ^クま^クり^ク

顔^クあ^クげ^クを^ク流^クる^クを^ク流^クも^ク髪^ク此^ク長^ク

角

廿九日

舟^ク興

更^クり^クり^クと^ク四^ク日^クの^クい^クな^ク此^クむ^クり^クい^ク

同

一夏^ク半^ク尽^ク

多ふ摘く竹枝葉の如き極乳 山川

廿一日 長崎

藤のしほりて花のつぼみ

廿二日 長崎

春の日の影のあはれ

廿三日 長崎

夏雲のふりそよぐ

花のみ上

花のみ下

六月朔日

白雪の黒き影をうけて

霜がこぼれゆく冷き氷餅

遊瀛海寺

あゝともの鴨とりふ無名人の汗

二日 所見

藤の家を星の川を乃涼哉

棄あつて踏とけられ螢か

中をたふふ振るるるあさる

藻や魂あつて川まぐみ

角

漢石

沾徳

角

巳百

曲水

柴栗

夏ひとくみハ恨んゆわさき
三日 巴風亭
万四

水うてや蝉も雀もめくくと
南
巴風

赤あや牧のあまらるる作の隈
三ヶ月は涼と半くさ家端庭
巴百

うらぐくと庭下りあや三つは
白川名海くまゆまにゆき
同

四日 花を小むらさきとく
角
金鳳

涼くくと海は深く入日の中

髪けす小草此ゆるくぬ涼さ
白雨は下狗英先ん損う那
幽也
同

五日 祇多日次の歌を

河養姫徳前を記り流るぬ
角
曲水

夏山之菴をえうけく二曲
同

石山より

男形く一夜癒てん春の山
角
中よ

六日 祇多日次の歌を

松の紫色青水望月此か流さ
角

七日

京形川よりく 抵屋舎よりやうく

鉦ホッふりる人のきくあひもみぞぞ

同

夕暑カウ一葉空寂くさた繼 梳

卜宅

鵬シタカもかきゆきさき居れ暑サ哉

栗平

八日

母の足又は出まきまぐ瓜

角

花つの中

母の母マツ逆源サカヒあう輝の影

僧 巳百

憶オモ子

梨の露去ももも巳フダ実ニのおそ

坡

梨水

二月の月ツキ林の本キその海ウミ

越人

九日

翁オウよりれみよ静の海ウミとて又
どち風カゼよあうととほりて
形カタもまマき海ウミをととめり

犬山の渡ワタあやも秋涼アキゾウとて

角

日の徳守トクモリを筆フデよのる月ツキ北キタ 二一面

巴山

花ハナものともれ鳩トビあやうり木平キヘイ賣

同

葉ハもありると何ナニる室ムロ北キタ暑アツサガ

氷花

夕涼ユソウも似合ニイぬ僧ソウ坐ザ丸マルまこと

竹井

毛モウとあうくまマ葉ハともれレ池イケの響ヒビ

ト

十日

曲水キョクスイの梅ウメ宿ヤドよ訪トモぐ
湖ウミ水ミヅをあまひの初ハツメに

連レン守モリあまを表ウラをふりうひる

角

七ナナ草クサ菴アンをくくひる

あゝまをへ網代に水魚を養てせん 箱

法華本門の心法

雨を浴へ漏出惠どもとの化る雨 車端下 非人

麻よりさとりふ句法結構
一はくそくそくは我母の退去
ゆくは身をそりりるく翁や
茶止りて こと依るく他人の
それ程のまことやのしとま
記あるべし

十一日

水の終り風の垣ぬる廟之事 角

十二日

夕暮師はしし記風を誓うぬ 同

十三日 拜天王之御旅所

里のり此宿官よりむ鼓式 角

十四日

蒲の穂中 懈を雇くおもせん 同

引たり 勤くぬ身名異なり 百里

擔ふこれあをそ程の帯 地延乃可

十五日

娘入せし時名もつらう土用子 角

十六日 怖夢をこんて

切ラレきりぬるる 凍り 蛭の 蛭 同

衣食住ろ二三ハ何きうかろんじ

侍らん物を草を芽余の安身
乃も食儘くく天命を辨と
之れを

山川

酸 砂る齒を赤茶老り洞く那

苦 蕨根焼くも母の味を蕨の臺

其 井乃底の蛇を忘らば蔓の臺

辛 百草より蓼叶実を著

鹹 蕨の根を搦まもや後産の根

十七日

各まきくくたまき重名あゆみ

媛寡

蠹の尊や干すくぬも妹うみ

達曙

角

ぬまろり猫の昼寐れ異サカ

寒蟬

十八日

抱蕨や妻かえくまのふも

角

次のあは結白不拍子の躍うね

笑種

京ふいさう

大蓼此柳魚了せふ條あま

舟竹

蠅はうのちのも枕の眠うま

巳百

伊勢のふりて狐の
くまつてふやうの白

仁あまのまをさあそく本月廿

は狐つさ日比乃田交うをまら
狐のまはハまありしと
手は甲しと狐うてはまらあま

あましくきえぬるふあしき
しきまなはし
元禄三年七月の事なり

十九日

月中を望みたる月く涼しく事

角

紗乃切り螢つらん鳥部山

菖深

何きて夢たれと家すそ舟

枳風

廿日

夕白守白き結垣根をこ

角

刺意たけむりあされや秋の風

曲水

難波江より

春しきいづの角出候の芦

路通

廿一日

市中乃支屋のこ
内より中いそぐしき
秋鳴すさくらを轍や夏津糸

角

佛ゆさくくんおうとあ蓮うね

村色

廿二日

煖瀑を背年暑く田刈元

角

廿三日

煙雨村
夕ちや洗ひをこ土の色

同

ゆづきや炊く煙をつまきけ

百里

魚の鰓白雨をこ町を川

遠水

廿四日

廿五日

廿六日

誰どりの後をたると
寺まわりのまをたると
おん一團のゆきを
あはれむ事

不奪百州膏腴
文選のこととあり

百姓を志す油や
一夜ほ

木乃春を
あはれむ

蝉泣きけ一日啼く
秋の露

蚊乃声を悪と
対を修う事

炭を中へ
蚊をたると
あはれむ事

ついでと
あはれむ事

半袴と
あはれむ事

角

同

同

由之

童次

賤水

仙化

廿七日

豊年

めづ味は
今年を
澄らん
瓜茄子

角

白雨乃
あはれむ事

友五

廿八日

雨中夕

夕立り
桐花の
繁茂と
白く

角

廿九日

かきく
陽を
あはれむ

風松ゆき
や
目と
家出
おと
響き

同

晦日

夏後
御師の
布扎と
あはれむ

物くと
花火と
あはれむ

本の下
花と
あはれむ

莫陵

種

七夕乞巧の夜

心非心是

ホメ

さしあしついでに言ふに君業

定良

この法松屋中々

業人其を説く事も涼哉

鋤立

あきも暮ふ佛也能は築

防風

七月朔日

父の如くしき依んておぼく

まゆりおぼくおぼくおぼく

き合ふおぼくおぼくおぼく

おぼくおぼくおぼくおぼく

松ノ下

秋と風ハ身ウハ心ニ寄リ

角

替ツボクラマキク内井戸乃月

定良

蕪乃渠を立日と皇 稲刈

幽也

相撲ウシウシハウシウシ

松風

教ウシウシウシウシウシ

溪石

右左あは 磯乃 是法

角

二日

妙ウシウシウシウシ

手拭乃 篋ウシウシウシ

角

跡来てもとまのふや桶の百合

魚羽

寐ウシウシウシウシ

水

其のウシウシウシウシ

且水

元山とあそびゆくをよま岩つじ
卯花年乳母多しと垣根

三日 市隅

西側年灯籠多し水やみの空

離婁之明

と川ありし兔の毛並ほろろ

不薪畜乎樊中

庭篁さうきく吹進出さう後

読本智度論

深き志とくはれとみまの白蓮花

一念

全峰

らぬ影

角

荀深

同

艸の露こぼれもぬるもぞ千と月

荀深

四日

五日

六日

星あしや物さういり胸の中

七日

七夕や露よび入る笛をきく

時あそびあうけ草や星代舞

名のくぬ史婦世まゝ天の川

煽煽乃風かよ返あけ

星河ひやまあハ一ツかん

同

素見

仙化

水

里東

星合や人老うしう歌 夜幾ツ 青女
石

本年と予、電やと人
を家身の縁らうう之出
半や何とせやれハ言下

何くを七巻あらん 星ま 是吉

八日 三遷のわいあは慣ひく
七の小ありき奴姪さきく
のほせきねこ一月あつて
七のしりしやうりうれを
いとをいす

五 文月や唐さく文字と母の恩 角

題 張氏隱居

星合志氣然し 流赤の伶系 艶瓜
お年

花ノ廿八

夕顔や半閑しハツり鐘 瓠瓜
姉ト振舞や女の上中物矣 訓女

石山幻住菴ハ芭蕉翁くんじ
徜徉也所也く解
鉤をまつてそとく

いつるきて落の系書は佛餉也 里東

幻住菴山上

本塚の柱をつつて 住居も 曲水

山下

物種を小松の海るけしを 同
蟬乃きり氣の面やザンザ海 峯
鶉とつれ持能も眠る夜西水 水花

舞のよれ廟よりあまは暑ナク

石鼓

自畫讚

いざ書く異ヲ忘れんぬれは
あ本より清みなり神く柳が

魚人
千破

九日

生靈酒の清くぬ祖父う那

水石
角

人の子なりしく親し秋の昏

半夢

六日

海邊酸中
稲妻や朝暎去るは空より又

角

十日

花はうみふは桑ハ楊中
あふひ多くとみの芳ふくらんと
いふ波切あるあつとむを

花ノサレ

親とあもは清きあは海や蓮賣

角

星今乃夕一淋し台比丘尼所

揚水

新鳥や命とくはく 土 沙

童次

十二日

美女集男 灯を籠よてくは遠く

角

負ゆる我 咄よはせぬ相撲くぬ

遠水

十三日

南流り其酒とらひありとく
世向のむ川よる西村上人
の燈井ありと清しあり

濁る井をくろふくありそ秋の雨

醒 癖まむの病吸 情りの車

花葉よく飾るとる花よる花葉が

同

雪

土相の金山寺といふありき

十四 山寺や人這うに花著うはら

みそ萩や分限よりゆき

角

草村より飯のともや煙の風

琴風

秋風や肉さへはしのぬれはら

溪石

水蕨れをれをまうくう完

角

玉川を我 舟を重なるも向か

童次

玉まうりかきうをて 釣る昏性

琴風

門をや萩 挑野ハ 盆の中

溪石

秋風よ 俤とくく冬 玉まはら

裴淵

花ノ三十

十五

葛の紫れ赤い色波を恨くは

角

荀子其辭富而兼

白妙有り 夜の牡丹を風粧し

揚水

孟子之文直而顯

白雪やちりもくと山をみ

同

揚子之語簡而奧

本かすしよ軒乃屋と名を架

同

十六 陀羅尼品

銀を罪なり 秤や暮糸

角

亦三年の回愁

とつハ香かさ一 暮乃ち

仙化

亡親之日

孝養施餓鬼

百

地獄 為結や火振鳴り水の色

餓鬼 子を捨てる老の門や 打落

畜生 馬士も倒れ外や 未乃病

修羅 过く小切ちし 西瓜

人道 文了死身を収へや 生身魂

天道 稲妻乃こけふ 炎之那

声聞 秋風や消さぬ 禪 空

縁覚 蓮乃実や 風子ものくま

卷ノ三十二

菩薩 濯子ハ母乃かたれる 菩薩

十七日 蕪らねる男の推つてきる

西瓜 瓜小奴乃 髭此 流まきり

輪 少くも 葉小片 同しナセの件

算木餅を文字ヌカぬる 灯籠

昼麻 一々 表をあてて 花持綱

十八日

フシととと 庭の萩

萩 萩も七り 同り 院 萩

角

探泉

東瓦

同

加

里東

すまひとくからくぬる 童うの中
 牢人の肩やうらまら 秋の雪
 老僧をまてむ掃 や过せむを
 いろとをとかく忽に我と猿むらり
 夏は身や酒りしありと時を味
 ても樹をなぐるりや 大北つ
 寺くは掃除をひらり 柳か
 誰あめそ 萱^{クサ}まらり 依りてを友
 菟菟の紗箱まの 氣雀うま
 妙り力と名をまて 妙ぬお撰は

番組

肅山

花ノ三十二

文松
あ

戦

東

亀

半

同

野

同

岩

三番三 沙とくそく 願ゆる免華乃酒
 高砂 ねら葉やまらで 目出度つゆ
 頼政 いそれとく 未摘まらる 茶本か
 東北 東をた母をく 經よむ時あか
 紅葉狩 切色とく 太刀と火 派らん 岩の手ね
 三輪 泊瀬女を おあつく ころ 好まら
 三井寺 ころ 狂わら ねおれ 月まら
 光松 雲梅やま 時 通 伝まら 汁の起

十九日満百

まのあき 月ふ成まらり 母乃教

布

世に竜田の神宮の志が
 又この枝の中を此其
 抗美表は物より自志
 抄写乃琵琶の抄りて
 其血あふふ一筋先
 二日の夜に来し 離町
 髻乃田令お撲を
 土窓の道に
 角 石 池 角 石 池 角 石 池

花

妹をゆむあや
 垢癖坊より
 志糸の本卦
 残の月何
 蝶の隅ま
 老功をあ
 霜乃ハ
 角 石 池 角 石 池 角 石 池

その偶の灯の毛 志しゆくや
せむしを遊をうり守 麩半録
すり針也 虫居の海を足踏して
着やあるとて 本曾の麻衣

四角 角
石山初住菴を

曲水

郭公 背中 尼くや 龍 藤 之 於
辨 ありこ 山 を つ び 反 草
招く 馬峯 の さくろふ けて 花 あり
急 ありが 味 を 志 する 泣 食

花ノ水

其角
同 水

角 同
年 此 條 大 堂 會 之
鴨 あり 多 相 田 下 房 此 之 入 入 入
子 の 白 と り 又 母 の 飾 け け
鐘 持 乃 子 外 之 衣 衣 衣
七ツ 控 ち 著 控 所 の 衣 衣
ち あり 事 二ツ の け け 其 衣 衣
志 の 都 七 回 會 あり 衣 衣
町 汁 二ツ 控 あり け け 衣 衣
舅 の 紋 と 足 け け 衣 衣
志 衣 衣 衣 衣 衣 衣 衣

角 同
水 角 水 角 水 角 水 角 水 角 水

いくね家用下いせく 葵
 せれ人小酒買つあつをかじり
 さてよい月やほめく居る也
 長き世は穢まふあまも 嘆き
 菜をまふふ 藤中乃秋
 け恋と兄の合意を侍斗
 てる 秘ヒキのきえぬ 氣の毒
 居士早小衣ハ濡く 袖を危
 六浦の色中 曙乃 扱く
 く火やらぬ海より 指をさらひ上
 せり目乃 察 具足くはあり
 水 角 水 角 水 角 水 角 水 同 水 角

花ノ戒六

何者乃ひまはりしと家々の屎
 のけりくく 富士の白雪
 月影も鼻の先も成りしん
 弦乃あまき下 龍膽
 振袖乃 細織 控なるあの上
 りまゝの多伊を 糸の 明外
 素直く道のりさハ 妻とて
 あ中若下 小判 舞く 折
 分別平わらぬ 花巻 せき
 扇をさるる 蝶 のくくんと
 角 水 同 水 角 水 水 角 水 角

箱中付し幸衛、
まのうらなう千那亭よ
体くひる印興

叶えのまねはを以 挿せり

珠

昼前の時き振形る旅の日記を
いづるし別居を向ていす必
ししを桂考一抄し申すあつた
死のころまらと船よ油る業とふ
あはれせり申し次をきりて
のこども多くれ

筆とさし流金やかろき下凍
増ふす流るる此 之しを
いふ解解と云教り月をた

其角
蒲山
彫棠

花ノ四七

之れなる者月ノ罨を着て外
川末ハ瓶治うまゆさふぶる
す裁形を 腹を 次
盗人と音名をそ終ん里のる
ゆらる甲斐色あつた法決
筆やちと物とそ 柱は材時由
紋尺知るる 君々 提 灯
あつたふあを治り思ひ出
早歌とち表あつたさな
死すゆと人形ゆさ 泪とく
くはくさるる 尼の針 糸

角
山
同
棠
同
角
同
山
同
棠
同

袖よりあはく物滲せよ雀の子
 着る多れく 瓶よりさす 菜
 菜菜又身ハ下と共さす乃月
 有 葱糸より小弓まいたん
 ナ 二人しそりみうらり此類より
 梳と海毛乃 憎き 何舟
 金糸と包おれおろくおぼ
 あり乃 塔と成紐しそり
 ありの石と 葉との 三千何
 孝前家 嫁よりきの山 古 御
 横川よりみのきき菜の物

三行ノ枕八

角 小 日 棠 日 角 日 山 日 棠 日 角

物家よりあはく物滲せよ雀の子
 着る多れく 瓶よりさす 菜
 菜菜又身ハ下と共さす乃月
 有 葱糸より小弓まいたん
 ナ 二人しそりみうらり此類より
 梳と海毛乃 憎き 何舟
 金糸と包おれおろくおぼ
 あり乃 塔と成紐しそり
 ありの石と 葉との 三千何
 孝前家 嫁よりきの山 古 御
 横川よりみのきき菜の物

日 角 日 山 日 棠 日 角 日 山 日 棠 日 角

呈餞

安房の海奉りまきり汗拭

那棠

そと

あまの海をく思ふ西の海

肅山

暈帯ふれはあしを短衣

棠

六月十一日

あまの水乃移くれそ車傍

卜宅

又立けし海は乃帯ふ

き角

あまの月をいづくに息切て

棠棠

袂たもと袋ふくろちやん 年一草

宅

花ノ池

茅薄 牛足く與往川まきせ

角

何なにくちかえり 雪ゆき若わか孫まご若わか

末

壺つぼ空くわ風かぜと定さだつさよる里さといよきり

宅

凡たゞ十分じふぶん中ちゆうふら

角

貧ひんゆいよ祐すけ乗のりう猪いのハハけおん

末

香か化けとりふ多おほ家や 宰さい人にん

宅

夜の雨焼食やのあめやきニツにつあざあざくせ

角

泣なく志しりつさあはハハ福ふくまん

末

下した細こ乃の結むすひ目めもま志しま

宅

少すく使し赤あかさあそけのあま

角

郵ゆう方ほう下した手てを御ごんとまきりこ

棠

六月日よし 福む久人 宅
 かの姫之守と云ふ花あり 宅
 桃よりあやしくあむきなる堂 宅
 十 蜂乃巢いふ海さきもの工也 宅
 一ツ時責乃 沙馬出はる 角
 碎越と海さきかゝる 舟 柴 宅
 ぬるをかさしよ水 漆 斑 宅
 三川小まぶる舟なる月の影 角
 箱書あり色 さいり 判 刀 宅
 四ツ五ツある舟と家玉手箱 宅
 人々買せそあそふ 依 珠 角

花ノ下

五月日よし 空ありそふ古那 宅
 柄とちきりく扇をさく 風 宅
 歌の料ゆりて門より令 角
 人くし犬乃吼也いふ 犬 宅
 灯をよせく史とさる 煩の皮 宅
 うき急流る所く北とれ 角
 又きあゆまのふれ者かふ益 宅
 遠巢 寫巢より水能くらす 宅
 甲斐文被定さるふ歌の春の月 角
 神さへ入らすむ 網一乃 宅

をのききゆひおきてうけ花大船
志ある物織を橋よまく夜
夕月小湯のしるをまなほ深ひく

七月十九日半時

揺らぎて坊主ありりり過相撲

秋も涼しし一疊基

湯次めて廻り新湯と花傳と

下子焼火をくりお月乳

州の戸張氷柱小買て轆と若

市を聞かき錢うく無所

且水
浮萍
鬼翁

其角

遠水

岩翁

角

水

翁

花の十二

我より古き佛法守り

家子仕ぬ色多れとて妻

自起り小滝を背をかくらん

盲表小足ゆれ茶髪

あゝい又月をよとふ船の敷

水施縁鬼あね松も片浪

鯉切る小孩りしやう秋の風

僕押しかけ三里ある馬

お年小ありのと娘めをみせし

忘小かあゝ代 庶中の友を

王城より討てまの事流いせれ也

角

水

翁

角

水

翁

角

水

翁

角

水

猶如のり 茶を煮るもあはぬ 乳母の 慈心 耗^{タリ}く
 うなひより 乳母の 慈心 耗^{タリ}く
 風よまきく 水の 砂 味
 暖簾を巻とまわす 煙を掃
 きりぬ 茶碗のむ 抄りひ 子
 目くらせに 糸を 編^トする 葉の 酒
 月は 善信の 舟を 舟と 向
 此度と 去り 舟を 舟と 向
 綱を 船も 舟を 舟と 向
 精をの 糖の 禁を 舟と 向
 藤 舟を 舟を 舟と 向

長ノ字ニ

春のつら 氣の 麻入 舟を 舟と 向
 妻の 舟を 舟と 向
 あらう 舟の 狸の 舟を 舟と 向
 砂の 舟を 舟と 向
 西氣つら 舟を 舟と 向
 物より 舟を 舟と 向
 志の 舟を 舟と 向
 尺の 舟を 舟と 向

偶真

秋風也 舟と 舟を 舟と 向
 送る舟 舟と 舟を 舟と 向
 岩翁
 老翁

葦をゆき山石も形を變りぬ

事後乃^レ此^レの^レ事^レなり

亦一^レ道は流れて此^レの^レ水^レを^レ流^レす

月を^レあま^レり 鹿の^レ角^レを^レ海

志と^レい^レふ^レ道^レを^レ和^レと^レして

武士^レも^レ和^レと^レい^レふ^レ道^レを^レ和^レと^レして

秤^レを^レ入^レる^レの^レ重^レと^レい^レふ^レ道^レを^レ和^レと^レして

い^レら^レ此^レの^レ事^レ 是^レを^レ和^レと^レして

む^レか^レく^レと^レい^レふ^レ道^レを^レ和^レと^レして

和^レと^レい^レふ^レ道^レを^レ和^レと^レして

う^レあ^レけ^レ小^レさ^レく^レ男^レを^レ和^レと^レして

志水

仙化

キ角

百里

化

角

里

化

角

五

尺^レ五^レ寸^レ三^レ分^レ

青屋が^レい^レふ^レ井^レの^レ輪^レ水^レ柱^レつ^レり

い^レら^レ井^レの^レ輪^レ水^レ柱^レつ^レり

當^レを^レ付^レ 是^レが^レ殿^レ かん^レぞ^レく

十分の^レ重^レを^レ見^レせん 花^レは^レ紅

燒^レや^レあ^レる^レ 鹿^レの^レ山^レく

釘^レか^レく^レ建^レ立^レる^レ 人^レを^レ和^レと^レして

疑^レの^レ右^レを^レ和^レと^レして

疑^レす^レと^レ並^レ不^レ揚^レを^レ和^レと^レして

和^レと^レい^レふ^レ道^レを^レ和^レと^レして

新^レの^レ和^レと^レい^レふ^レ道^レを^レ和^レと^レして

多^レハ^レ潮^レを^レ和^レと^レして

化

角

五

化

角

里

化

角

五

化

角

世所乃喧嘩口吻のこゝろに
 さいまらむ此くくくと居
 ありくと割と巻統をつくと
 所もソある 意のあらう
 けりやあぢをふゆ法 屯者
 夜に云は掃く子 聚るこがく
 月雲と名を此切を枕まく
 針立を
 所かきり 野に之字と地^{ホリ}の
 率^{バイ}軍とくも奉りかむ
 地^{ホリ}の竹の巻も 常^{ホリ}あり
 里 角 化 里 角 化 里 角 化 里 角 化 里

花ノ四十一

鞠を^{ホリ}くくして 習志門^{ホリ}の地
 十坊にさく 鹿門^{ホリ}の巻
 雲を^{ホリ}林を 結^{ホリ}乃^{ホリ}本
 樂せんと母^{ホリ}く 旅^{ホリ}のあきて
 菊^{ホリ}今^{ホリ}く 山^{ホリ}をさわく
 里 角 化 里 角

花つみ下巻



